

コードギアスの世界に
アミバの能力を持つた
転生者って需要がある
んですかあ〜！？

TNKエース

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リハビリ作品です。

コードギアスと北斗の拳と言う異色のコラボをご覧ください。

感想批評お待ちしております。

目次

コードギアスの世界にアミバの能力を 持った転生者って需要が有るんですかあ 〜!?	1
あの星の名は	14
ただいま	27
エピソード1 皇帝ルルーシュと叛逆の 皇子	59
エピソード2 開戦	71
エピソード3 裏切り	83
エピソード・ファイナル ルルーシュ・ ヴィ・ブリタニアが望む!	102

コードギアスの世界にアミバの能力を持った転生者つて需要が有るんですかあゝ!?

コードギアスの世界にアミバの能力を持った転生者つて需要が有るんですかあゝ!?
シンジユクゲッターにある比較的まともな廃墟の中では若い大柄な男性と初老の男性が怪我をした老人や少年を治療していた。

初老の男性は慣れた手つきで治療をしていき、大柄な男性もやや遅いが治療をしていく。

此処は時枝医院。

正確にはその跡地であった。

初老の男性の名は時枝修造。こここの院長だった男だ。

大柄な男性の名はアミバ。修造の助手にして転生者だ。

神と呼ばれる存在によってこの世界に転生させられてしまった存在だ。

強制的に与えられた能力はアミバ……そう、北斗の拳に出てくる。あのアミバである。

彼にとって唯一の救いはアミバの持つ歪みが無いことと、トキの顔に変えていた為、

原作のアミバよりトキに見える為と歪みと言う邪心が無いことで、ケンシロウが見てもトキと思うだろう。

「お爺ちゃん。アミバさん。ご飯出来たよ！」

治療の途中、修造の孫である時枝メグがご飯が出来たことを告げる。

「おう、守くんの診察終えたら食いに行くわ」

「先生。此方は田丸さんを送っていきますね」

「おう」

アミバは老人を入口へと送ると、

「いやあ、アミバ先生のツボ押しマッサージは効くのお。痛みがもうないわい」

老人、田丸はピョンピョンと跳ねる。

「田丸さん。痛みが引いたとは言え、無茶は禁物ですよ」

「分かってるよ。ワシは此処でいいからアミバ先生もご飯を食べてきなさい」

そう言つて田丸さんは堂々とした足取りで帰つて行つた。

その後、もう一人の患者である安西守を見送つてから台所へと向かう。

「?先生は?」

アミバは台所内を見渡すも、修造が居ないことに疑問を感じるが、

「お爺ちゃん、板野さんが腰をやっちゃったって聞いて大急ぎで行っちゃった。

お爺ちゃんの事はほつといてご飯食べちゃいませよ」

メグはそう言うとお茶碗にご飯を盛っていく。

「はい。アミバさん」

「ありがとう」

二人の手が触れると、顔を少し赤らめる。

ウブか!?

と、言いたくなる。

まあ、二人は好き合っているのではあるが、

何故、この二人がこうなっているのかは、約半年前まで遡る。

シンジユクゲッターに飛ばされたアミバは黄昏ていた。

戸籍も、仕事も、知る人すらいないゲッターではアミバは金銭も寝床も用意できなかった。

これが本来のアミバなら「奪えば良からう？」とゲッターの住人を虐殺するなりして糧を得ていただろうが、中身が一般人のアミバではそんな事は出来なかつた。

腹も空き、この数日は水しか口にしていない。

唯一の救いはアミバの肉体が其れでも生きていけたのだ。

しかし、空腹には勝てずに座り込んでいた。

そんな中で、一人の女性を複数のチンピラが取り囲んでいた。

そして空腹の苛立ちでチンピラ達をボコった。

そして空腹で倒れてしまい、近くを通りかかった紅月グループ(当時はナオト生存)に時枝医院に送られ、身寄りが無い。半ば記憶喪失の類で時枝医院で雑用として受け入れられ、そこから医療助手↓秘孔によるマツサージ(トキ的な)による医師として認められる。

偶にテロリストの名を語るチンピラが現れるが、アミバの力で軽くあしらった。

だがしかし、逆恨みしたチンピラ達はメグを誘拐し、金かアミバの命を要求してきたのだ。

アミバはすぐさま、己の命とメグを交換しろと言うもののチンピラ達は角材や鉄パイプでアミバを殴打していく。

しかし、無傷!世紀末ボディに生半な打撃は効かないのであった。

殴られも殴られも倒れないアミバに対して、苛立ちを覚えたチンピラのリーダーはナイフでアミバを刺し殺そうとするが、そこで颯爽と現れたナオトグループの南&杉山がメグを救出、哀れなリーダーはアミバのなんちゃって北斗百裂拳でボコボコにされた。

まあ、命懸けで自分を助けにきてくれたアミバにメグはチョロくも惚れてしまい、アミバと付き合うも、双方、プラトニツクすぎて修造や玉城はさつさと付き合えば良いのにとぼやくほどだ。

しかし、彼等の幸せは容易く崩れてしまう。

とある日の午後、何故かブリタニア軍がゲットーを攻撃してきた。

多くの住人が慌てふためくなか、アミバ達は金銭と身の回りの物を持ちつつ、田丸と板野、守を連れて地下鉄道を通りながらゲットーから離れて行こうとする。

先頭は田丸と修造、中側にはメグ、守、板野の三名が、最後にアミバが殿として走っていた。

彼等は全員が注意深く進んでいくが、運が無かった。これしか言いようが無かった。

突如、爆発音と共に天井が崩れた。

アミバ達は知らぬが、ブリタニアの兵士がロケットランチャーで

「鼠は地下にいるって言うしな……」

と、適当に地面を撃つたのだ。

その後は同僚に弾が勿体無いと戒められ、別の地域に向かった。

閑話休題

「くっ……」

アミバは頭を振りながら立ち上がろうとすると、コンクリートや土が身体から落ちていく。

気絶……していたのか？皆は!?

アミバは辺りを見渡すと、信じられない……信じたくないものを見た。

地面にコンクリートと土と、血と……

「み……皆……」

土とコンクリートに潰された死体。

「ウソ……だろ……」

アミバは立ち上がろうとした膝を地面につける。

ガタツ……

しかし、コンクリートの山から音がした。

「?!」

アミバはコンクリートを投げて音のした方を探る。

「ううっ……」

「メグっ！」

アミバはまだ生きているメグを見つけ、次の瞬間絶望した。尖った瓦礫が腹部を貫いていた……

アミバは絶望した。

然るべき施設で然るべき処置を速やかにすれば助かるだろう……

しかし、何処にそんな施設は有る？今のゲットーに有る病院で手術施設が有るのは時枝病院だけ……そこは既に戦火に包まれている。

故に絶望。

アミバには刻一刻と命が失われていく恋人を救う事は出来なかった。

「アミ……バさん……」

「メグっ。濟まない……俺は……俺には……」

「ううんっ。アミバさんの……せいじゃないよ……それよりも……守くんをお願い……」

見ると守も生きていた。板野が覆い被さる様にしていた為、大きな怪我も無かった。

「アミバ……さん。お願いが有るの……」

「何だい？」

「何だ？今ののは？」

「……………」

ブリタニアの学生と拘束具の女と言うミスマッチな二人はその慟哭を聞いた。

「……………」

泣き喚き終えたアミバはそこに座るだけだった。

視線は何処を見ているのか分からず、只々そこに座り込んでいた。

「五月蠅い。五月蠅い。猿は鳴き声も五月蠅いな……………」

線路内には五人のブリタニア兵士がいた。

その中の一人……………は親衛隊の制服を着込んでいる。

アミバは幽鬼のような動きで立ち上がる。

「お前らは……………」

「ん？」

「何故、皆を殺す。皆が何をしたって言うんだ？皆……………皆、今日を必死に生きているだけだつて言うのに……………」

「決まっている。貴様等が弱者だからだ！」

親衛隊の男は嘲笑うかの様に言った。

周りの兵士も笑う。

「そう……か……」

アミバの気が高まる。

「お前らに！今日を生きる資格は……無い!!」

アミバの怒りと共に着ていたシャツと白衣が破れていく。

そこには鍛え抜かれた筋肉が見え、親衛隊の男達は僅かに飲まれる。

「う、撃てえ！」

隊長格の男の号令と共に親衛隊は己が手に持つアサルトライフルを撃ち放つ。

彼等にはアミバが穴だらけになると思ったが、

その予想は悉く外れる。

アミバが消えた……否！親衛隊達の目にも止まらぬ動きで壁へと駆け出したのだ。

そして、跳躍し、壁や柱を足場に親衛隊達へと接近していく。

原作アミバが使った技。鷹爪三角脚の応用技である。

「シャオっ!!」

そして瞬間に兵士達の横を通り過ぎていくアミバ。

「……はっ！武器も無い癖に『ドサッ！』？……なっ?!」

親衛隊の男が振り向こうとすると、何か落ちる音、彼は下を見ると倒れ伏し、顎から上が四等分になっていた兵士達の姿。

アミバが、修めた南斗聖拳の流派が一つ。南斗水鳥拳の技である。

「ナイフ? いや……あの男は素手だぞ! あんな半裸でそんな物を隠せる筈が「おい……!!?」

男が混乱している隙にアミバは近付き、

両方のこめかみに親指を突き刺す。

「へっ? 刺さってる?」

「この指を抜いたら……」

「抜いたら?」

「お前は死ぬ……」

「へっ? 死ぬの?」

「試してみるか?」

指が僅かに引き抜かれる。

「い……嫌だ! 死にたく無い! 死にたく……」皆、そうだ……」

そして、一気に引き抜かれる。

「……………ははっ、何もなばっ!!」

親衛隊の男は頭から裂けた。

「思ったより……大した事は無かったな……」

殺意を持って殺したものの、アミバの心には何の動揺もなかった。

アミバなのだからか？それとも僅かに心が壊れてしまったのかは誰にも分からない。

「済まない。メグ。先生。田丸さん。板野さん。皆の遺体をそのままにする俺を許してくれ」

アミバは守を抱き抱えると、避難する為に駆け出す。

「(ブリタニア……絶対に許さんぞ!!)」

その胸に憤怒の炎を灯しながら、

此処からダイジエスト……

その後、扇達と合流したアミバは何処かの倉庫に退避するも絶体絶命の危機に陥る。

そしてルルーシュのおかげで助かり、扇グループに身を寄せた。

そして、原作通りにルルーシュがゼロとなり、黒の騎士団が結成。

アミバは医療メンバー兼歩兵部隊に入る。

(KMFはレバーを壊してしまう為、乗れなかった)

その後、血染めのユファイでは惨劇の場を見て、

「ユーフエミア……この……悪魔め!!」

テメエ……の、テメエの血は！何色だぁー!!!」

と、激怒し、KMFから脱出したユファイの右腕を切断の後、首を刎ねようとするも、ラ
ンスロット・エアキャヴァルリーによつて邪魔される。

その後、ユファイは出血多量によるショック死、

ブラックリベリオンでは歩兵として参戦。

井上の生存と、少数の団員（杉山含む）と共にインド軍区にて身を隠す。

その後暫くは、トキと名を変えて世界各国のVIPに医療行為をしながら後のための
コネを作っていく。

コネを作りながら難民保護や孤児の援助を可能な限りして銀の聖人と呼ばれる。

黒の騎士団への合流は100万の奇跡以降。

蓬莱島の建設には人一倍どころから倍以上働いていた。

超合衆国結成後の黒の騎士団内部での役職は斑鳩内の医療班班長。

そして、黒の騎士団は第二次トウキョウ決戦に挑む。

あの星の名は

あの空に浮かぶのは

「(綺麗に抉れてるな)」

アミバは徹夜明けの脳味噌に喝を入れる為にブラックコーヒーを飲み込む。

先程までは医務室は満員御礼。医療班は先程まで全力全開フルスロットルだったの
で一部は仮眠中だ、仮にもアミバの肉体を持つアミバには、かなりの余裕があった。

「そういえば、ブリタニアのシュナイゼルが停戦交渉しているって、誰かが言ってたな
……」

アミバはコーヒーの容器をゴミ箱に捨てて、重傷患者の容体を見に行く。

そろそろ交渉も終わっただろうと、医務室で朝飯兼昼食の中華粥をハフハフと食べて
いると、

ドゴオン!!と轟音と大きな揺れが発生し、粥の中身を零してしまうアミバ(及び食事
中の患者達や部下達)

「熱っ！熱っ!!」

何があったのか？ブリタニアからの攻撃？と外を見てみると、

「蜃気楼が……」

ゼロ専用機である蜃気楼が本来なら出てくる事のない場所から出てきたのだ。

しかも、ブリタニアのモルドレッドがそれを追いかけていく。

アミバは訳が分からなくなり、ブリッジへの内線を開く。

「ブリッジ！此方アミバだ！一体どうなっている!? どうして蜃気楼が!?!」

『此方、ブリッジです！私にも分かりま…あつ』アミバか？扇だ！ゼロが裏切ったんだ

！」

はあ!?

アミバだけではなく、その場に居た全員が頭に？マークを浮かべる。

アミバは再び外を見る。

蜃気楼がモルドレッドに追いかけれ…何か瞬間移動していた。

アミバは俺の頭がおかしくなったのか？

と眩いた。

暫くして、蜃気楼を追撃して何故か海面に激突した暁隊のパイロット達の処置を終えて、俺は扇達の元に向かう。

そこには吉田や永田達の写真に手を合わせている扇とカレン達、旧扇グループの面々がいた。

「アミバか……」

「何が有ったんだ？」

アミバは扇を見据える。

「ああ、実は……」

扇は語る。

ゼロの正体はルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。

ブリタニアの皇族で有った。

ルルーシュはギアスと言う力で人を操り

あの大虐殺を起こした。

更にはルルーシュは旧中華連邦領地に有ったとある施設で、非戦闘員や少年少女を虐殺したとの情報もある。

アミバは頭を抱える。

そして、頭の中で線と線が繋がり、

「扇、その情報を持ってきたのは、シユナイゼルなんだな」

「ああ！」

「カレン。ナナリー総督とルルーシユは兄妹なんだよな……」

「えっ？うん。そうだけど……」

「ハア……」

アミバは溜息を一つ。

「つまりは、敵国の宰相が出してきた情報を全て鵜呑みにして、我々のCEOを売り払い、超合衆国及び、全ての日本人を裏切ったのか……」

「違「アタア！」うがああ！」

アミバは、扇に向かって経絡秘孔の一つ『新匣中（術者が声をかけないと動けなくなる）』を突いた。

「南、杉山、扇を医務室に連れて行け。もしかしたらブリタニアに何かをされているかも知れない」

「ちよつと待ってくれ！俺は「アタア！」アガアっ！」

今度は頬内（顎の力を無くす）を突く。

「他の奴から聞いたが、こいつの横にはブリタニアの女が居たそうさだ。」

恐らく何かしらの薬物による暗示をかけられたかも知れない」

「[[[!?!]]」

「って事は何か？扇がゼロを裏切ったのはブリキ女が何かしたって事か!？」

「可能性はある。そもそも優柔不断を絵に描いたような扇が、交渉ごとを強気で出れるか？」

「確かに……」「そういえばブラツクリベリオンの時にあの女見たな……」「俺たちはシュナイゼルの掌で踊ってたって事かよ！」

カレン、南、杉山はアミバの言葉に同意してしまう。

「あ〜！あ〜！」

扇は何かを言っているが、顎の力が無い為に何も言えなかった。

「安心しろ。扇……仲間であるお前を見捨てねえよ。例え、ブリキの奴等に操られていたとしても……だよな！皆！」

玉城は扇の肩を持ち、他の面々もああ！と返す。

「よし、ブリタニアや藤堂が言った事を皆で手分けして、聞こう。考えるのはそれからだ」

「あつ、そう言えばゼロが、戦死したって公式発表どうする？」

アミバはお前らな……と呟き、

「とりあえず、それは保留だ。最悪代役を用意しないと……俺は公衆に立つのは苦手なんだがな……」

アミバは溜息を付き、出来ることを始めた。

斑鳩内の会議室

そこにはアミバ、カレン、南、杉山、玉城、ラクシャータ、顔に湿布を貼った藤堂が揃っていた。

「では、先ず俺から行こう。」

「医務室で扇の血液検査をしたが、一切の薬物反応が無かった」

アミバの言葉に、旧扇グループの面々が騒めく。

「その代わりに、MRAの結果大脳の一部に極軽度の異常が見付けられた。」

通常、この部位に異常が発生する事は無く、有ったとしても、何かしらの言語障害や痴呆が発生する」

「つまり……」

「普通じゃあり得ないって訳ね。アタシも脳は専門外だけど、これが普通じゃないって

のは分かるわ」

「そして、俺達は既に有り得ない事を知っている」

「「あっ」」

皆が気づいた。蜃気楼のあの不思議な動きを、まるで瞬間移動したかのような動きを……

「追つてた暁のログを見てたんだけどさあ。

何か、急にパイロットの動きが止まってから落ちちやったって感じだったわ」

「ほう、それはそれは、ではこの映像を見せてくれ」

アミバはスクリーンを起動して、映像を出す。

映像には褐色のブリタニア人の女性。ヴィレッタ・ヌウが映っていた。

何故か、彼女の前には縦に五分分されたカボチャが有った。

「さて、お嬢さん。貴女のお名前と所属は？」

「あ……ああ、私の名はヴィレッタ・ヌウ。ブリタニア軍中佐だ……」

ヴィレッタは青褪めた顔で、自己紹介する。

「デイトハルトからの情報だと機密情報局と言う組織に所属していたそうだが？」

「あ……ああ……ゼロ……ルルーシュを監視する為にな……」

「それは何故？」

「C・C　……と言う女を捕獲する為にだ」

「ほお、何のために？」

「それは……分からない……ただ皇帝陛下に命じられただけだ……」

「では、ギアスと言う能力に心当たりは？」

「そ……それは……」

言葉に詰まるヴィレッタ。

そこにアミバの手が先のカボチャを手に取り、

バキバキと音が鳴り響く。

「ヒッ！分かった！言う！言うから!!」

陛下から聞かされた！陛下自身もギアスを持ち、部下にも時間を止めるギアスを持つ

ている!!」

彼女の前にバラバラにされたカボチャが投げられる。

そこで映像は消えた。

「あのブリキ女を尋問したのかよ！」

「相変わらずスゲエ腕力だな！」

「つてか、ギアスってブリタニア側の超能力じゃねえか!!」

玉城の怒りは最もだ。

ルルーシユ一人が持つ催眠術の様な力と思えばブリタニアの持つ超能力……マッチポンプである。

「そういえばさ……零番隊うちののに聞いたんだけど、ルルーシユが虐殺したって施設に、こんなマークが有ったんだけど……」

カレンが出した紙には羽を広げた鳥にも見えるマークが刻まれていた。

「このマーク、神根島に有った遺跡にも有ったんだけど……これって偶然なのかな？」

カレンの疑問……神根島にいる皇帝……ギアスと言う超能力……アミバはこの三つに繋がりはないかと思考するものの、何かしらを企んでいる程度しか考えられなかった。

「少なくとも、シュナイゼルには接触はやめておいた方が良いな……」

「しかし、この後は星刻や神楽耶様との停戦交渉が有る。」

その時にはどうしてもシュナイゼルと顔を合わせることになるぞ」

場が静かになる。

「つてかよ。そのギアスってどうやってかけてんだ？」

「5円玉でも使うのか？」

「玉城の的外れな一言で緊張した空気が少し綻ぶ。」

「漫画とかだったら眼とかか？」

「いや、それだったら蜃気楼の一件はどうするんだよ」

「とりあえずさあ、この後は神楽耶達が来てからにしない？」

グダグダな空気をラクシャータが締め、その場は解散になった。

それから、暫くして星刻と神楽耶達が輸送機でやってきたので、これ迄の経緯を話す。
「ふむ、ゼロ……いや、ルルーシュがギアスなる力を持っていたのなら、高亥が黒の騎士団を受け入れたのも分かる」

「それに、ゼロ様の起こした奇跡の数々の正体も、シュナイゼルの言う通りにゼロ様がユーフェミアを操つ「ゼロはシナナことしねえ！つか、俺がそんなの持ってたら皇帝に死ねって、さっさとぶっ殺してるよ！」

神楽耶の日本人逆殺の真犯人がユーフェミアではなく、ゼロがユーフェミアを操って行った。と言おうとすると、玉城が反論する。

「俺あ……ゼロの話の聞かずに……親友だと思ってたアイツに銃を突きつけちまったんだ。」

もう、ダチを疑いたくねえんだよ！」

「玉城」

玉城の慟哭に南達はおろか星刻の心にも響く。

「俺もゼロがあんな事をするとは思えない。」

ギアスの事を抜きにしてもユーフェミアの変わりようは異常の一言だ。

多少でもユーフェミアを知っている人間なら可笑しいと思うだろうし、そうなったらゼロが何かをしたと思うのは明白だ。

俺の予想でしかないが、シユナイゼルがギアスで後催眠の様な何かで日本人を虐殺しろと命じていたと考えたほうが自然だ。

何せ、弱肉強食の思考を持つブリタニアの王族だ。

使える物は異母兄弟でも使うんだろうさ」

アミバの中では、扇がルルーシュを絶対的な悪だと思っっている様に、シユナイゼルは爽やかな顔の中に冷血非道な面を持っている。と認識していた。

まあ、曲がりなりににも正義の味方をしようとして、仲間の事を考えているルルーシュと敵側でその心に熱を持たないシユナイゼルでは信用は比較にならない。

「ふむ、しかし停戦交渉はどうするか……いつその事、通信モニターごしでやるべきか？」

「ですが、それでは超合衆国の威信に関わります」

「けど、シユナイゼルと目を合わしたら操られるんじゃない？」

皆が皆、意見がでず……悩んでいると、

「少し休憩にしよう。少し休めば何かしら良い案が出るかも知れない」

アミバの提案に皆、同意する。

一方その頃、アヴァロン内部ではスザクがロイド達にアルピオンを用意する様に命令をしていた。

そして、アミバは看板部分で砂糖多めのコーヒーを飲みながら、空を見ていた。気分を変えれば、何か思いつくと思……

洗脳される覚悟で自分が新血愁を突くか？と考えながら空を見てみると、

……北斗七星が綺麗だな……

と、関係のない事を考えていると、

その横に怪しげな星を見つけた。

「おいおい、まさか……あの空に浮かぶのは……」

死兆星
……

ただいま

ただいま

嫌な予感がする。理屈では無く、直感的な何かだ。

それは式根島……いや、神根島の方角。

ギアス……遺跡……ブリタニア皇帝……間違っているかもしれないが、俺の中の何か
が繋がった。

神根島にある遺跡はギアス能力の増幅装置で、皇帝は遺跡でギアス能力を使って世界
征服を行おうとしているのか？

無論、アミバの推理は的外れではある物の、世界をどうこうすると言う一点のみは
合っていた。

星刻も、神楽耶も俺の様な偽の天才なんかより、よっぽど優秀だ。

後の事は任せて、俺は神根島へと向かう為に格納庫へと向かう。

途中で玉城と出会い、少し気になる事が有るから偵察に出ると言い。

玉城が何か言ってくるが無視して格納庫へと向かった。

格納庫の端に鎮座している。アミバ専用機『七星』（ななほし）

蜃気楼の変形機構の試作品をベースに、絶対守護領域を簡易化した守護領域と加速力と最高速度に特化したフロートユニット、蜃気楼をも超えるステルス性能を持つ。紅蓮聖天八極式やランスロット・アルビオンを除いた機体の中ではトリスタン（飛行モード）ですら追いつけない最速最弱の欠陥機である。

最速最弱の欠陥機？と言われてもピンと来ないだろうが、

守護領域の防御力は輻射障壁よりも高いものの、絶対守護領域に比べれば低い。

オマケにエナジーの消費も攻撃に対して適時に対応する絶対守護領域に対して、守護領域は一枚板の様なシールドを展開する事しか出来ない（形状は変えられる）。

そして、欠陥機の特徴と言われる存在……フロートユニット……見た目はブリタニア製のフロートユニットを基本としているが、このフロートユニットは先も言った通り加速力と最高速度に関してはピカイチである。

そう、Gもまたピカイチであるのだ。

ルルーシユが使えば死に、カレンやスザクですら最高速度に至れば失神する程の速度。

これを使えるのはギアス世界ではチートと言つていい肉体を持つアミバだけしか乗れなかった。

故の欠陥機

そして、武装は蜃気楼なら拡散構造相転移砲を持つが、七星には無く、代わりにエナジーファイラーを増設している。

故に、装備は自衛用のハドロシヨットとスラッシュハーケンのみ。

サザールランド級ならともかくラウンズや斬月級の機体に比べたら最弱と言つていいだろう。

アミバは七星に乗り込み、神根島へと向かった。

アミバが神根島に向かった事を神楽耶達に伝えた玉城、

既に七星は出てしまい、通信にも応じない。

「アミバめ！何を考えている？」

星刻は眉を顰める。

「……………ですが、アミバは一介の医師です。」

本来ならここに来る人間ではありません」

傷の治療を終えたデイトハルトの言葉に、それは分かっている！と怒鳴る星刻。

「寧ろ、彼が、向かった先にある神根島にはブリタニア皇帝がいます。」

もしも、ギアスで操られでもすれば、ゼロ亡き黒の騎士団は完全に崩壊します」

本来の世界線では、扇にボコられて黒の騎士団を抜けようと考えているデイトハルトだったが、アミバに治療された分の義理程度は返しておかないとデイトハルト自身の気は済まなかった。

「分かっては……………いる」

星刻は力無く、答える。

黒の騎士団……………及び超合衆国はルルーシュ……………ゼロの存在と、アミバのコネクションの二つが大きい。

ゼロの策謀とギアスによる戦果、アミバの北斗神拳による西洋医学では不可能な治療術……………その凄さは星刻自身の身が知っていた。

その頃アミバは最高速度で神根島に向かっていった。

皇帝はグレードブリタニアか遺跡周辺のどちらかだろう……。

アミバとしては失敗は出来ないししたくない。

故に、馬鹿をやる事にした。

グレードブリタニアブリッジにて

モニカ・クルシェフスキーは周辺の警戒をしながらも、何故皇帝陛下はこの様な島に？と考えていた。

しかし、その考えは部下の声で掻き消された。

「クルシェフスキー卿！未確認の飛行物体が此方に接近！……速い!!」

「迎撃しろ！」

モニカは直様に迎撃を命じる。

ジノのトリスタンでさえ、この速度は出せないと知っているモニカは、弾道ミサイルだと判断し、グレードブリタニアの単装砲とブレイズルミナスで防御しようと指示を出す。

しかし、

「飛行物体！尚も接近！映像を出します」

「KMF!?馬鹿な!?……ロイヤルガードを出せ！直衛のKMFも「敵！さらに加速!!推定速度！マツハ3!」「何っ!？」

飛行するKMF……七星は守護領域を鏝の様に展開し、展開されていたブレイズルミナスをシャボン割るかの如く貫き……そして、グレードブリタニアの中央部分を貫いた。

「ぐう……総員！直ちに侵入者を排除しろ!!」

モニカは部下に指示を出しつつも、自分の未来がない事を確信していた。ラウンズを降ろされ、修道院に入られれば御の字、悪ければ首が飛ぶであろう。

まあ、そんな事を考えても、彼女にはもう関係が無かった。何故かって？

七星が自爆したからである。

元々サクラダイトは爆発する性質を持つ。流体化すれば掌サイズでも10メートル強は殺傷能力を持つ。

では、個体とはいえ、KMFのサクラダイトが爆発すれば？そしてそこが戦艦の内部だとすれば？

爆散し、僅かに残った両翼のパーツが海面に墜落した。

残った親衛隊達はそれを呆然と見ていた。闇夜を利用して近づくと影に気付かずに

アミバは海面を泳ぎながら、神根島へと辿り着く。

アミバがやったのはこうだ。

先ず、自動操縦で七星を動かし、ある一定の距離になったら、最高速度で突っ込む様に仕込んでおいたのだ。

そして、最高速度に達する直前に自分は七星の中に入れておいたマント（中東にて使用）を持ち、七星から飛び降りた。

降りる迄の風圧は守護領域を変形させ防ぎ、

飛び降りた後は、マントを忍者が使う様にブレーキとして使い、海面を走行し、最終的には泳いだが、無事に神根島に到着した。

アミバは濡れた黒の騎士団の制服を脱ぐ。

最後に七星に仕込んでおいた自爆装置を使って、グレートブリタニアごと爆発させたのだ。

そして、別に用意してきた服を着込んだ。白を基調とした……もつと言うなら、原作のアミバが来ていた様な服だ。

そこに扇やカレン達がつけているヘアバンドを付ける。

「行くか……」

そう呟き、アミバは駆け出した。

その頃、遺跡の方では、

皇帝を除いた面々、ビスマルクと研究者や護衛の親衛隊が騒いでいた。

「クルシエフスキー卿！ 応答せよ！ クルシエフスキー卿!!」

ビスマルクは通信機でモニカと連絡を取ろうとするが、誰も通信に出なかった。

「ちい」

役に立たない無線を投げ捨てると皇帝の前に膝を突き、

「陛下。御身に危険が迫っております。此処は速やかに黄昏の間に退避をすべきかと

……」

と、進言する。

「ふむ、遺跡の用意はどうなっている？」

「はっ！もうまもなく扉を開く事が出来ます」

「そうか……「陛下!!」

皇帝が油断した瞬間、森の中から幾つもの矢状の何かが飛んでくる。

ビスマルクは直ちに察知し、皇帝に向かってくる物を全て切り落とす。

「なっ?」

ビスマルクは驚く。

何故ならそれは矢でも銃弾でも無く、先を尖らせた木の枝だったのだ。

幾度も投げられる木の枝。

それは鋭く、近くに居た研究者の男の頭蓋を貫き、親衛隊の足や肩を貫く。

「くう……この野郎があ!!」

親衛隊の一人が手に持つアサルトライフルを乱射する。

放たれた銃弾は森の中へと吸い込まれていく。

ヒュッ

ズドッ

しかし、再び投げられた木の枝は彼の心臓を貫き、

最後は胸に突き刺さった木の枝に呆気に取られて死んでしまった。

そして残ったのは中にいる遺跡の中にいる研究者と皇帝とビスマルクだけになると、

男は現れた。

白い衣服を身に纏う男。

「貴様……何者だ？」

皇帝は問う。

「……死神だ……」

男……アミバは左手を前に出し短く言い放つ。

「このワシの前で死神とは言え神を名乗るか!？」

「……」

アミバは答えない。最早問答は無用と言わんばかりだ。

「陛下。お下がりにください。そしてラグナレクの接続を」

ビスマルクはアミバの前に立ちはだかる。

「うむ。俗事は任せるぞ。ビスマルク」

「イエス ユア マジエステイ」

皇帝は遺跡の奥へと進んでいく。

「逃すと思っっているのか!？」

アミバは跳躍し皇帝へと向かう。

「させると思っっているのか!？」

しかし、ビスマルクがインターセプトする。

そして二人は同じ事を思った。

「(コイツ！強い!!)」

「どうやら、お前を殺さなければ、皇帝を殺れないようだな」

「先も言ったが、させると思うか？」

アミバは南斗水鳥拳の構えを、ビスマルクは剣を構える。

「シャオ!!」

「ハアツ!!」

手刀と剣がぶつかり合う。

と思いきや、アミバは攻撃を一度止め、手刀を剣の側面に滑らせていく。

アミバの必死の一撃が迫るなか、ビスマルクは空手で言う前蹴りを放つ。

しかし、アミバはそれを膝蹴りで迎撃する。

二人の蹴りがぶつかり、その衝撃で離れる二人。

「フツ」

そこでビスマルクは自分が笑っている事に気が付いた。

ああ、そうだ。私は……この様な戦い……否！闘いを求めていたのだ!!

ビスマルク・ヴァルドシュタインは名門貴族のヴァルドシュタイン家の三男として生まれてきた。

貴族の三男坊なんて、予備の予備程度の価値しかない。

ビスマルクは手っ取り早く兄達と差別化を付けるために軍学校へと入り、その才覚で二十歳でナイトオブラウンズのナイトオブファイブに駆け上がった。

当時のラウンズの大半は自分より弱く、ナイトオブワンですら純粋な決闘ではビスマルクには勝てず、ビスマルクは有頂天になっていた。

しかし、その鼻っ柱は後に折られる。

ビスマルクが24歳の時、新しくラウンズ入りした女が居た。

その女の名はマリアンヌ。

当時まだ18歳の乙女だった。

高々平民の女風情がナイトオブラウンズか。ラウンズの格も落ちたな。

とビスマルクが侮辱し、マリアンヌは冷静に

では、お相手してくださいませんか？ナイトオブファイブ。

と、模擬試合を行うものの、結果はビスマルクの敗北。

それも完敗だった。

敗北した当初は自害しようかと思つたが……生来の性か、強くなつてやると一念発起、今までしていた付き合いとしていた女遊びや賭け事と言つた他のラウンズからの誘いを全て断り、

只ひたすら訓練と職務をこなしていった。

しかし、その翌年……ブリタニア皇帝シャルルに対しての反乱が起こる。その反乱は後に、

血の紋章事件

と呼ばれた。

その時、ビスマルクはナイトオブファイブとして、地方貴族の反乱の鎮圧を終え、帝都ペンドラゴンに帰還した時に、当時のナイトオブセブンとイレブンが現れ、皇帝に旗を翻しす事をビスマルクに告げた。

無論、ビスマルクはこれを拒否し、二人を気絶させようと動こうとすると、二人は銃を取り出し、ビスマルクに向けて発砲。

しかし、この二人は既に戦闘体勢に入っていたビスマルクの手によって殺される。

そして彼が向かったのは玉座の間。

そして、彼が見たのは……

返り血を全身で浴びながらも凜とした美しさを失わないマリアンヌと、マリアンヌに斬られ、血を噴き出しながら倒れ伏せるナイトオブワン。

ビスマルクはその時、マリアンヌの強さと美しさに見惚れてしまった。

後にマリアンヌは皇帝を守った事から、閃光

の二つ名を貰い、マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアとして、皆も知っているルルーシユとナナリーを生み、

ビスマルクも今回の一件で反乱に一切の関わりが無い事が分かると、唯一のナイトオブワンズとして長い間一人で皇帝を守ってきた。

その時に皇帝の同志となり、V・Vからギアスを授かる。

それでマリアンヌに挑むも善戦しても勝てず、暴走するまで鍛え、ギアスを使わずともある程度の相手なら動きを読める様になった。

しかし、そんな彼に不幸が起こる。

マリアンヌの死だ。

あのマリアンヌが死んだ。テロリスト如きに、

ビスマルクはその日、普段は飲まない強い酒をラツパ飲みする程に悲しみに暮れた。最早、自分とまともに渡り合える者はいない。

生身でもKMFでも自分と戦えば敗北が決まっていた。

ナンバーズ初のナイトオブラウンズ。枢木スザクは自分を越えてナイトオブワンになろうと考えていたが……弱い。ジノヤルキアーンと比べれば肉体的には強いが、自分に敵う程では無く、あくまでナイトオブワンになる事が目的なだけだった。

だが、しかし、目の前の男は何だ。

力、速さ、技、どれをとっても自分より強い。

ビスマルクの心は歓喜に満ち溢れていた。

「認めよう……」

ビスマルクの左眼の拘束にヒビが入る。

「お前は、マリアンヌ様に次ぐ実力者だど！」

そして、封じていたギアスを解放した。

「なっ?！」

アミバは驚き、直ぐに左手でビスマルクとの視線を防ぐ。

「安心しろ。我がギアスは陛下の様な目と目が合えばかかる様なギアスではない」
「そもそも…ギアスとは何だ？」

アミバは当然の疑問だ。

アミバはコードギアスの名前は知っているが、

それが何を意味しているの迄は理解していなかった。

ギアスと言う言葉自体も扇から聞かされたのが初めてだった。

「さあな、ギアスを授けてくれた方が言うには王の力らしいが、私は只一人の騎士でありたい」

「ああ、そうか……」

話が終わりだと言わんばかりにアミバは攻撃を開始しようとするが、

「左手の突き……」

動く前に当てられ、動きを止めるアミバ。ならばと、

「右足の蹴りか……」

またもや当てられる。

「コイツ……」

「我がギアスは未来を読む！先程までと同じと思うな!!」

「未来予知だと？面白い……面白い？俺はそう言ったのか？」

アミバは自分で自分が言った事が信じられなかった。

アミバにとって戦いは目的を叶える手段でしかない。それを面白い？

「どうした？」

「いや、俺自身はそうだと思っていなかったが……俺もまた一人の拳法家だったと自覚しただけだ」

アミバは淡々と眩き、構える。

「黒の騎士団。斑鳩医療班班長アミバだ」

ビスマルクは少し呆気にとられるも獰猛な笑みを返す。

「我が名はビスマルク・ヴァルドシュタイン！ブリタニア皇帝シャルル・ジ・ブリタニアに仕える騎士なり！いざ！」「尋常に勝負!!」

二人は勝負を叫び共に駆け出す。

数分が経過する。

「(攻めきれない！南斗水鳥拳を持ってしても！)」

「(捌ききれない！我がギアスを持ってしても！)」

アミバは未来を読むのなら、読まれ、反応する前に攻撃を届かせれば良いと考え、猛

攻撃していく。

ビスマルクもその猛攻撃を剣で捌いていくも、僅かだが傷が増えていく。

無論ビスマルクもやられっぱなしではなく、幾度も反撃をするも服と皮膚を僅かに斬るのみだけだった。

アミバは埒が開かないと思い、一撃に……最大の技を持つて一気にケリをつける事を決意する。

ビスマルクもまた、アミバの雰囲気が変わった事を感じ、己も渾身の一撃を放つ為に力を貯める。

「いくぞ!!南斗水鳥拳（模倣）奥義!!飛翔白麗!!」

アミバは空高く舞い上がる。

その動きは力強さに満ち溢れており、ビスマルクも僅かに見惚れる。

アミバもビスマルクも渾身の一撃の為に互いに集中していた。

故に気づかなかった。

皇帝を狙うもう一人の刺客の事を、

「ユフィの仇っ!!」

空高く舞い上がったアミバに覆いかぶさる様に飛び上がる刺客……枢木スザクが、アミバの背を斬り裂く。

背中を斬り裂かれたアミバは体勢を崩し、地へと倒れ落ちる。

「ヴァルドシユタイン卿……無事ですか？ 皇帝陛下は何処に？」

スザクはビスマルクの側に近寄ると、皇帝は何処に居るかを聞く。

全ては現皇帝であるシャルルを廃し、シユナイゼルを皇帝にする為に、

そして、日本を取り戻す。

スザクはビスマルクが皇帝の居場所を教えてくださいと思っていたが……

「この……痴れ者があ!!」

ビスマルクの激怒共に放たれた斬撃を何とか避けるスザク。

「いつ、一体何を!!」

スザクは混乱する。一応はまだ味方のはずのビスマルクが一方的に攻撃してきたのだ。

「枢木い!!」

しかし、ビスマルクは止まらない。自分の渴望を満たしてくれるはずのアミバを後ろから、それと騎士として大切な決闘を穢されたのだ。

ビスマルクの攻撃を後方へと跳躍し回避するスザク。

しかし、

「ホアッっ!!」

倒れ伏したアミバが腕力のみで跳躍し、

「アタアっ!!」

そのまま蹴りをスザクの顔面に喰らわせた。

そのままスザクは近場の岩に頭を打ち、気を失う。

「痛た……」

アミバは背中を摩る。普通なら絶対安静だが、

アミバは秘孔を突いて一時的に痛みを紛らわす。

「……………部下の非礼を詫びよう。済まなかった」

ビスマルクは頭を下げる。

「いや、結構だ……………これは決闘だが、俺たちは戦争をしている……………」

「……………そうか」

再び二人は構えた。

問答は無用。

相手の隙を両者は探し出す。

何処かで爆発音が聞こえるが無視する。

ビスマルクの通信機から反乱の報告があるが無視する。

お互いにお互いしか見えていないし聞こえていなかった。

そして再びの爆音が響くと同時に、二人は動いた。

「ハアアアアアツ!!!」

アミバ、ビスマルクの両名は互いの速度が遅くなっているのを感じる。

世界から色が、音が消えていく。

そして、

渾身の一撃が腹を貫いた。

アミバの腹を……

ビスマルクの突きはアミバの横腹を貫き、アミバの両手突きは片方は外れ、もう片方はビスマルクの左肩に突き刺さっていた。

「惜しかったな……」

あと数センチ、突きの軌道が左だったらビスマルクの頸動脈を抉っていただろう。

しかし突き刺さったのは左肩だ。

ビスマルクは剣を引き抜こうとするが、

「はっ、引つかかったな……」

口から血を噴き出しながら、アミバは腹筋に力を込める。

「何っ?」

タンッ

アミバは一步踏み込む。剣はアミバの腹を更に進む

タンッ

更に一步踏み込む。更に剣は深く刺さるが、

「此処は俺の距離だ」

アミバは拳を握り込む。

「き、貴様は……まさか……」

ビスマルクは信じられないものを見る目でアミバを見る。

「この傷でお前と言う強敵に確実に勝つ為に俺は命を掛けたんだ!!」

アミバの言葉と共に筋肉が隆起し、上半身の服が破れていく。

「いくぞ!!ビスマルク!!」

これが!俺の!!

あたた!あたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたた

たたたたたたたたたたたたたたたたたーっ!!!」

アミバの高速の乱撃が……否!その全ての拳が秘孔を貫く。

「ぐおおおっ!!」

殴られたビスマルクは剣を手放し天へと吹き飛んだ。

「北斗百裂拳だ!!」

今度は自分が地面に倒れ伏し、ビスマルクはまだだと立ちあがろうとする。しかし、肉体が激痛と共に肥大化していく。

嫌だ!まだこの闘いをしたいと思っていると、

「ビスマルク……お前はまさしく……強敵ともだった」

アミバの言葉にビスマルクは一瞬呆け、そして……只一言、

「お見事」

その言葉を最後にビスマルクは爆散した。

Cの世界

「……陛下、申し訳ございません……」

「ビスマルク……破れたのか？」

皇帝の顔は驚愕に染まる。

帝国最強の騎士がマリアンヌ以外に敗北するなど、あつてはならないのに……
皇帝は無言でラグナレクの接続を続けていく。

ルルーシユは皇帝を殺す為に式根島のブリタニア軍をギアスで操り、出撃しようとしたところで……皇帝専用の乗艦であるグレートブリタニアが撃沈してしまった事を知ってしまう。

「一体誰が？」と思うが、この機を逃す訳には行かず、残った敵機を奇襲で撃破し、自分

は神根島に降り立つ。

そして、そこで見たのは……

「ビスマルク……お前はまさしく……強敵ともだった」

「お見事」

ビスマルクはどう言う原理か分からないが身体が爆発する。

ドスっ！

そしてアミバは膝立ちに倒れる。

無理もない土手っ腹には未だにビスマルクの剣が刺さっている。スザクに斬られた傷も治療せねば出血多量で死んでしまう。

アミバは腰のポーチから緊急医療キットを出す。出血多量のせいか取り損ねてしま
う。

「クソっ……流石に無茶し過ぎたか……」

あと少し、あと少しだけ動けば良い。

あのロールケーキヘアーに一撃さえ当てれば……

アミバは普段に比べれば稚拙な治療をしていく。

「アミバ……」

ルルーシユは何故、自分でも声を掛けたのか分からなかった。

「ゼロ……か」

二人の間を沈黙が交差する。

「皇帝はその遺跡の先だ……先に行け」

アミバは視線すら交わさずに言い放つ。

「……………良いのか？」

「お前の方が怨みはでかいんだろう」

後で一発ぶん殴らせろ。と拳を向ける。

「分かった……濟まない……」

ルルーシユはそう言うのと遺跡へと脚を進めていく。

五分もしない内にアミバは応急処置を終わらせる。

しかし、腹の傷と背中への傷は包帯を紅く染めていく。

アミバは自分が死ぬのを感じていた……しかし、アミバに悲壮は無かった。

ゼロは再び奇跡を起こすだろう。

黒の騎士団も星刻がいるし、藤堂達もいる。

患者に至つては既に自分が居なくても快方に向かつている。

此処で死んでもあととは大丈夫だと確信していた。

だが、しかし、ブリタニア皇帝に対する怒りはある。

この命が残っている内に一発ぶん殴る。絶対にだ。

遺跡の方で爆発が起こる。

自爆!?

アミバは痛む身体を抑え、遺跡へと脚をすすめる。

しかし……それは叶わなかった。

何故?

アーニヤ……いや、マリアンヌが駆るモルドレッドがシュタルクハドロン砲でアミバを撃つたのだ。

マリアンヌは

「ごめんなさい。本来の身体だったら騎士として一騎討ちに応じたかったけど、この身体じゃ貴方には決して勝てないわ」

マリアンヌはアーニヤの身体では決して勝てないと分かっていた。それほどまでにアミバの実力は高い。

故に彼女は戦士としては失格だとしても大切な人を守る為に、生身の人間に対して

シユタルクハドロン砲を撃ち放った。

ハドロン砲の一撃を生身で受けて生き延びる人間はいない……

マリアンヌはモルドレッドを降ろし、黙祷を捧げる。

この名も知らぬ。勇敢な戦士に対して……

そして、ルルーシユ、スザク、C・C・はシャルルとマリアンヌと対峙し、ルルーシユは明日を願った。

その結果、集合無意識はルルーシユの明日を選び、シャルルとマリアンヌは光になって消えていく。

「このお！賢しき愚か者めがああ!!」

シャルルは下半身が光になりながらもルルーシユの首を……掴もうとしたが別の手に掴まれる。

それは、ルルーシユでも、スザクでも、ましてやC・C・のものでもなかった。

「死神が貴様の命を刈り取りに来たぞ」

アミバであった。

「アミバー！どうして?」

「お前!」

ルルーシユとC・C・Cが驚く。

ルルーシユは母から、C・C・Cは消滅する瞬間を見たが故に、

「そんな！まさか!」

そんな中マリアンヌだけは理解した……

彼は自分と同じ様に精神力で擬似的な肉体を構成している。

マリアンヌと違うのは自分がアーニヤの肉体を依代にしているのに対して、アミバはCの世界に取り込まれたのに自身を構築したのだ。

「ふっ……」

アミバはシャルルを掴んでいる手とは反対の手で自分を指差す。

「俺は……天才だ」

ルルーシユと

「何が天才だ！ワシを拒めばその先にあるのは彼奴の、シユナイゼルの世界だぞ！善意と悪意は所詮一枚のカードの裏表！それを貴様等は!!」

「だとしても」

ルルーシユはシャルルを睨み、

アミバは拳を握りしめる。

「お前の世界は俺たちが否定する。消え失せろ!!」

アミバの拳がシャルルの顔面にめりこみ、吹き飛びながらマリアンヌと共に消滅していった。

後に残るは四人。

「ゼロ……いや、ルルーシユ。俺はこの世界に取り込まれて、真実を知った。

ユーフェミアの事も、彼女には酷い事をした」

アミバは軽く頭を搔く。

「事故とはいえ、ルルーシユ。あの虐殺の原因はお前だ。

俺はお前を許さない」

アミバはルルーシユの眼をしつかりと見る。

「だから、お前は生きろ。生きて生きて生きて、ジジイになるまで人の為に生きろ。自分で勝手に死ぬ事は許さん!」

アミバは次にスザクを睨む。

「枢木スザク。お前はもつと許さんがな!」

スザクをビシツと指差す。

「漢の決闘に水を差しやがって、ビスマルクの手前、ああは言ったがな、絶対に許さん!!」

いや、そつちかよと心の中でツッコむ三人。

「だから……ルルーシュを守れ。絶対にだ」

アミバはルルーシュとスザクの胸を軽く叩く。

「それが俺からの制約^{ギアス}だ」

「いいだろう。その制約^{ギアス}確かに受け取った！」

「俺もその制約^{ギアス}を受け取るよ」

二人の返答に、アミバは優しく微笑む。

「C・C……ピザの食い過ぎには気をつけろよ」

「おい待て！なんで私だけそんななんだ？」

アミバは踵を返し歩いていく。

そして風に吹かれる様に消えていった。

何もない世界をアミバは歩いていた。

いや、歩くと言う表現は可笑しい。足も何もないのだから、しかし前に進んでいく。

そして、アミバは懐かしい顔を見つけた。

……よお、久しぶり。元気に……って死んでるのに元気も何もないか？
ああ、皆、元気にしてるよ。杉山と井上なんか子供まで作ってるんだ。
そうそう。カレンも元気にしてるよ。今じゃ黒の騎士団のエースだ。
お袋さんも元気だぞ。

ああ、俺を待っている人？あの二人か……ああ、ありがとう。ナオト
アミバは更に前へと進んでいく。そして、ついに見つけた。
色々話したい事が有ったが先ずはこれだなと思い、言う。

……先生、メグ。ただいま……

完
コードギアスの世界にアミバの能力を持った転生者って需要が有るんですかあ〜!?

エピローグ1 皇帝ルルーシユと叛逆の皇子

エピローグ1 皇帝ルルーシユと叛逆の皇子

アミバが消えた後、ルルーシユ達は皇帝とナイトオブゼロとして表に出た。

無論ギアスを使って、

原作と違うのは、オデュッセウス達皇族は王位継承権は捨てられているものの、オデュッセウスは福祉関連の要職。

ギネヴィア達もメイドではなく、能力に見合った仕事をしている。

やっている事は原作とそう変わりがないが……

そして、ラウンズの襲来……は無かった。

理由はアミバが関連していた。

旗印となるビスマルクがない為、ジノとドロテアはジノの実家であるヴァインベルグ領に、身を寄せていた。

ジノの父であるヴァインベルグ侯爵はルルーシユに対抗する為に多くの貴族と同盟を作り、貴族連合としてルルーシユと対立を始めた。

とは言ってもまだ本格的な抗争はなく、貴族の権力維持を求めているので武力衝

突はなく、通信での対論と示威的行為（トリスタンやパロミデスがお供を連れて飛行してくる程度）をしてくる程度だ。

そして、ブリタニア本国をジェレミアに任せてルルーシュは超合衆国にブリタニアが参加する為に日本へと向かう。

原作と違うのは護衛としてナイトオブゼロであるスザクが同行している。

そして、アッシュフォードで会談が始まる。

会談は馬鹿をやらずに普通に進む。

そして、一度超合衆国の面々で話をする為に、ルルーシュにはクラブハウス内の一室（生徒会部屋）にて待つてもらおう事となった。

しかし、ルルーシュを待っていたのは……

「ゼロお〜!!俺達が悪かったから戻って来てくれよ〜!!」

玉城が泣きながらルルーシュに黒の騎士団に戻って来てほしいと懇願していた。

「ええい！離せ！後、鼻水をつけるな！洗濯が大変だろう！

スザク！カレン！お前達も見てないで玉城を離せ！」

突如の玉城の愚行に呆気にとられたスザクとカレン達黒の騎士団幹部陣も玉城を取り押さえてルルーシユから離していく。

「ルルーシユ皇帝……」

そして、ゼロがルルーシユの前に立つ。

ゼロは仮面を取ると、

「先生は……アミバ先生はどうなったんですか？」

かつて、メグとアミバに救われた少年。安西守だ。

何故、彼がゼロをやっているのかと言うと……代役である。

黒の騎士団だって無能では無い。

戦闘行為の有った神根島をシユナイゼル側の人間と合同調査。

ゼロの死の誤報と代役。

ゼロの虐殺したと思われる施設の調査。

扇の黒の騎士団除名（実際は保護。現在は精神病院に入院中）

ヴィレッタの処刑。

部隊の再編等多数の職務を（主に星刻や藤堂、カレンやラクシャータに神楽耶）をこ

なし、

干からびたバトラーや嚮団の無事なコンピュータからのデータを復元した事により、皇帝シャルルの時代から数多の人体実験が発覚した。無論、ギアスもだ。調査を終えた施設は死者を可能な限り埋葬し、施設そのものを斑鳩のハドロン砲で破壊し尽くした。

そして、ゼロの死の誤報と代役のゼロ。

これに関しては世界中、特に日本人の希望の火を絶やさない為である。

そして、どうしてそうなったのかをきっちり発表する為に、(半ば)偽の診断書による扇がヴィレッタ・ヌウの手によって薬物による洗脳を受けていたという事にしたのだ。

そこで、ヴィレッタ・ヌウを銃殺刑とした。

ブリタニアは何も言わなかった。

まあ、弱肉強食を国是としているので捕まった軍人は要らないとも思っているのだろう。

そして、扇は洗脳されていたとはいえゼロを裏切ったのは事実なので黒の騎士団から除名されてしまい、現在では精神病院でゼロがルルーシュが悪いと叫んでいた。

同じく藤堂も自らを更迭しようとしたが、次の人材が各国がせめぎ合いながら自分の国の人間を薦めてくるので中々後任が決まらなかった。

(扇の事務総長の役は星刻が兼任している)

そして、ゼロの代役。

ルルーシュを見つけたらゼロに戻って来てほしい。神楽耶達黒の騎士団幹部……しかし、戻ってくれる迄に超合衆国が崩壊しては元も子もない。故にゼロの代役だ。

そして、ルルーシュと体格の似た守が選ばれた。

しかし、一部の議員はゼロが偽者だと分かってはいるものの、ブリタニアの脅威に対抗する為に残っている。

閑話休題

「……………アミバは…死んだ……………」

「……………そう…ですか……………」

守は分かっていた……………けど信じたくなかった事を聞いて、静かに涙を流した。

「アミバの馬鹿野郎……………」

玉城も拳と掌を叩き合わせアミバの死を悼む。

それを見たスザクは、あの人はこんなにも慕われていたのか……………と思った。

自分にとってはユフィを殺したルルーシュの次に憎い人物。

無論、彼の気持ちも分かる。日本人を裏切りあの様な虐殺を行ったユフィを憎いと感
じると理性では分かっているが、感情が彼を許すなど叫んでいるのだ。

ルルーシュからは彼は医者だと聞いた。だから…ブリタニアを…ユフィを許せな
かったのだろう。

スザクは心の底でアミバに謝る。

その後、ルルーシュと黒の騎士団は和解はするものの黒の騎士団に戻りはしない事
を告げる。

そして、再びの会談。

結果は否決。

理由は原作と同じ人口差の問題…そして、貴族連合の一件を片付けてから再びの会
談迄に、超合衆国の法整備をしていく旨を伝えて、会談は終わる…と思いきや、

「大変です!!」

ブリタニアと超合衆国。両方の関係者が体育館内に慌てて入ってきた。

「何事ですか!？」

神楽耶は唯ならぬ二人に速やかに話を聞くことにした。

「本国首都ペンドラゴンが消滅しました!!」

「ブリタニア首都ペンドラゴンが消滅しました!!」

二人は同じ内容を話す。

「何っ!？」

「何ですって!？」

ルルーシユや神楽耶だけではなく、その場にいた議員達全員が驚く。

消滅? どう言うことだ?

何人もがそう思う中、ルルーシユと神楽耶はある結論に至った。

「フレイヤ……………」

ざわりっ!

第二次トウキョウ決戦にてトウキョウ租界を破壊し、3000万人を超える死傷者を

出したあの…………フレイヤ…………

「シユナイゼルか…………」

ルルーシユの眩きに、各国の議員達は騒めく。

最後に彼を見たのは黒の騎士団との神根島の合同調査の一件が最後だ。

ビスマルクの遺体と気を失ったアーニヤ、そして二人の機体を持って…………何処かに消

えてしまったのである。

その後は一切合切表に出てこなくなったのだ。

その場は一度解散となり、ルルーシユは輸送艇の中で画面越しにシユナイゼルと対面

する。

そして、ルルーシュを皇帝として認めずにナナリーを皇帝とする旨を伝え、ナナリーはルルーシュとスザクに敵だと宣言してしまおう。

『では、ギアスの方が正しいと言うのですか?』

『あら、ではギアスとフレイヤで人を操ろうとするシユナイゼル殿はどうなるのでしょうか?』

『えっ?』

「神楽耶!」

神楽耶が通信に割り込んできたのだ。

『先程ぶりですわ。ルルーシュ陛下。』

それにナナリー様も』

『えっ? あっはい。神楽耶さんもお久しぶりです……』

ナナリーは急展開について行けず、神楽耶に挨拶をしてしまおう。

『先程、ルルーシュ陛下に対して、ギアスが正しいか……聞いておりましたが……』

『はい。ギアスを持って他者を操るなんて有ってはならない事です』

『そうですか……ですが、ブリタニアにそれを言う資格はございませんよ』

神楽耶の言葉にナナリーは驚く。

『何故ですか?』

『ブリタニアは古くからギアスを使ってるではありませんか……』

神楽耶の言葉にナナリーはおろか、ルルーシュ達やシュナイゼル達も驚きを隠せなかった。(シュナイゼルの場合は眉が動く程度だったが)

『ブリタニアの銀の狂皇はご存じですか?』

『え……ええ、歴史の教科書程度ですが……』

銀の狂皇。ブリタニアの歴代皇帝の中で、都市一つの民が総突撃した後行方知れずとなった皇帝。

シュナイゼルが知っているのは精々その程度だ。

カノンやコーネリアもまたその程度の認識だ。

『では……彼の狂皇がギアスを所持しているのはご存知でしょうか?』

『なっ!』

これは流石にシュナイゼルも驚く。

無理もない。全く関係のないところから爆弾がやってきたのだから、

「狂皇……ライヴィル・S・ブリタニアは我が皇家の血を継いでいまして、その最後は神根島にて消息する前に、一度皇家に来ていらしたのですわ。」

しかも、その時にギアスなる力の詳細を語ってくれていまして、この様な悲劇を繰り返さない為に色々教えてくださったのですよ。

私も、ギアスという言葉を知るまでは戯言の類だと思っていましたけど……まさか真実だとは思いませんでした」

神楽耶の言葉にナナリーはそんなと驚き、

「それに、旧中華連邦に存在した施設にもブリタニアの特殊部隊のサザーランドやブリタニアが関与した人体実験のデータが見つかりました。

これについてはどう思いましたか？」

神楽耶の笑みにシユナイゼルは僅かに黙る。

「……………フツ……………」

シユナイゼルは僅かに微笑む。いつも通りに、

「ルルーシュ……いけないよ。またギアスで人を操るなんて……」

「は？」

そして、超合衆国……正確には黒の騎士団を取り込むのを切り捨てた。

出汁にされたルルーシュは一瞬思考が止まる。

『どうやら、皇代表はギアスに操られているようだね。』

『これ以上の問答は無用だよ』

そう言つて、シュナイゼルは通信を切る。

ルルーシュはシュナイゼルとは思えない程の杜撰さに偽物かと思つた。

(作者の技量不足です。すいません)

その後、首都から離れていた為に無事だったジェレミアと通信し、被害の詳細を聞く。ペンドラゴンは完全に消滅。そこにいた元皇族も全て死亡。

生き残つたのはグリーンダ騎士団を束ねるマリーベルのみ、

更にはユーロブリタニア、複数のエリア、一部本国のブリタニア軍が反乱を起こし、シュナイゼル側に付いた。

それも平民貴族問わずにだ。

反乱後に合流したジェレミアの同期の騎士曰く、

反乱が起こる前にお忍びでシュナイゼルが来たと言う話を聞いたらしい(本人は妻の出産の立ち会いの為に基地に居なかつた)

反乱軍に加わらなかつた者の大半はその日非番等で基地に居なかつた者だつたよう
だ。

「ちい！シュナイゼルめ、前々から仕込んでいたな！」

ルルーシュはテーブルを叩きつける。

その瞳には怒りの炎が灯っていた。

凶報は続く。

カンボジアにて浮遊要塞が出現し、こちらに向かつてに移動中。

各国の黒の騎士団とブリタニア本国の部隊（ジエレミアやマリーベル含む）は反乱部隊と交戦し、援軍は不可能。

更には貴族連合にいるジノ、ドロテア。更にはノネットまでもがシュナイゼル側に合流。既にいたアーニヤを含めて、敵のラウンズは四名。

更には元々のシュナイゼルに付き従う者達を含めれば、その戦力は此方の約3倍以上。

更には機動要塞やフレイヤも含めると……常人なら想像するだけで頭を抱えなくなる程だ。

唯一……正確には二つだが、救いは有った。

黒の騎士団が共に戦ってくれる事、そしてニーナ・アインシュタインがフレイヤの対抗策を作ってくれている。シュナイゼルのギアスに関しては自分のギアスで上書き（ニーナの許可は取った）で原作と同じように動いてくれている。

そして、遂に浮遊要塞ダモクレスが、日本上空に近づいてきた。

エピソード2 開戦

エピソード2 開戦

ダモクレスが近づくなか、ルルーシユは直属部隊と黒の騎士団を鼓舞する為に皇帝として、ゼロとして演説を始める。

『私に従ってくれている兵士達よ！シユナイゼルは卑劣にも帝都を……ペンドラゴンをフレイヤによって消滅させた！あそこには何万もの民が居たのにも関わらず……にだ！』

私はこれを決して許しはしない!!』

ルルーシユが演説すると共にゼロが斑鳩にて同じような演説をしていた。無論、これは守ではなく、ルルーシユが前もって用意した録音である。

しかし、ブリタニア軍も黒の騎士団も士気は低かった。

当然だをつい少し前迄、戦争していた相手同士が急に手を組むことになったのだ。

シユナイゼルを討伐しなければならぬのは確かだが、何故ブリタニア（黒の騎士団）と手を組まなければならないのか……と兵士達の士気は低かった。

そして、ダモクレスが視認できる距離まで来た。

アヴァロン内部

「ダモクレスからナイトメアが出撃していま……これは!」

「シユナイゼル殿下……やってくれたねえ」

オペレーターをしていたセシルの驚きと共に、ロイドは画面の向こうに映る機体を見る。

「まさか、ギャラハットにエナジーウイングをつけるなんてさあ」

ロイドの言葉通りに、映像にはナイトオブワンの搭乗機、ギャラハットにフロートシステムでは無く、エナジーウイングが装備されていた。

ならばパイロットは……

『ルルーシユ……』

ブリタニアの魔女と恐れられた嘗ての第二皇女。

コーネリア・リ・ブリタニアが現れる。

『この鬼畜外道め! ユファイだけでなく……ナナリー迄もその手に掛けようとかするとは……最早、貴様を弟とは思わん。このコーネリアが槍の鏑にしてくれる!』

ギャラハットはエクスカリバーの代わりに握られたランスをアヴァロンに向かって突きつける。

「姉上……では、兄弟は愚か帝都ペンドラゴンの民を手にかけて貴女達は何なのですか？」

ルルーシユはコーネリアもギアスに掛かっている事を確認すると、どの程度の変化が起こっているのかを確認する。

ルルーシユは自分と先帝シャルルのギアスから記憶を書き換えられてもその人間の本質は変わらない事を自認していた。(この作品ではジュリアス時代の事は覚えていますが、態々口に出す必要も無いと誰にも言っていない)

『そ、それは……』

それに関しては自覚しているのか言い淀むコーネリア。それを見て、ルルーシユは姉の本質は変わっていない事に安堵する。

『し、しかし、お前がギアスを使い、兄上達を操り、ユフィに汚名を着せたのは事実だ！それもあの様な卑劣な男に殺させる等『ふざけるなあ!!』』

コーネリアの言葉を遮った人物。それは、ゼロ……否、安西守だ。

「あの人は！あの人はな!!大切な人を目の前で失つても、命を救おうと頑張ってきたんだ!!あの時だつて！あの人はブリタニアのやった事を許そうとしていたのに、それなのにユーフェミアはあの虐殺を見たあの人の怒りや絶望を分かるのか!？」

守の怒声が、斑鳩艦橋内に響いていく。

「そうだ！あの虐殺を起こしたブリタニア側が、アミバを！俺達のダチを侮辱すんなあ！！」

玉城の言葉を皮切りに、黒の騎士団の大半、ナリタからの古参兵達がそうだ！そうだ！と同意する。

そもそも、シユナイゼルは黒の騎士団幹部であった扇を洗脳した疑いがあるのだ。

更に、シユナイゼルは帝都ペンドラゴンを消滅させ、ユーフェミアを操り、あの虐殺を起こした疑いもある。

そんな奴に与するコーネリアがアミバを侮辱した事で黒の騎士団の……特にアミバに身内を救われたりした団員達の士気が上がっていく。

そして、戦端は開かれた。

最初に始まるのは艦艇による砲撃。両陣のカールレオン級、ログレス級、黒の騎士団の斑鳩や小型可翔艦の単装砲が火を吹き、それをブレイズルミナスや輻射障壁で防ぐ。本来ならルルーシユとシユナイゼルが戦術を駆使していたが、黒の騎士団側の突出により総攻撃と変わっていた。

その中でも、カレン、藤堂、千葉、そして玉城が一騎当千の働きをしていく。

えっ？前の三人は兎も角、何で玉城が？

それは、アミバの影響である。

何で？と思う人間もいるだろう。

実はこの世界の玉城、アミバに幾度となく北斗神拳（弱）の餌食になっているのだ。

新入りの飲み会を経費という名の横領で落とそうとしたり、女性団員から軽度のセクハラ・アルハラ。その度に殴られ、秘孔で仕置きをされるを繰り返し、その度に肉体に負荷がかかり、玉城の神がかりな幸運と合わさったのか、身体能力が上がってしまったのだ。

とは言っても、スザクのような規格外に比べれば低い（ざっくり言うときり四聖剣クラス）

そのおかげか、原作よりも強くなり、機体も通常仕様から輻射障壁を装備し、右腕が特参型腕に変更（これは無頼ベニオ機から移植された）されており、以外とすごい程度には見直されていた。

そして、シュナイゼルはモルドレットとパロミデスを黒の騎士団側に向ける。

シュナイゼルにとって討つべきはルルーシュ、ルルーシュ無き黒の騎士団等、紅蓮を除いて警戒には値しない。

その紅蓮にしても、フレイヤを一発撃てば確実に倒す事が可能だ。

「フレイヤを黒の騎士団へ……」

景気付けの一発か、シュナイゼルはダモクレスの砲塔を黒の騎士団側へと向けさせる。

照準は斑鳩を中心にしてある。

「発射」

そして、放たれるフレイヤ。臨海寸前のそれは、ゆつくりと……しかし、確実に斑鳩へと迫る。

「フレイヤ射出されましたー」

斑鳩オペレーターの日向いちじくがフレイヤが撃たれた事を知らせる。

「ラクシャータ!!」

「OKえ♪」

しかし、それを予期していた黒の騎士団は既に対策をしていた。

小型可翔艦から一機の暁?が射出される。

?が付くのは、本来の暁に比べると、頭部が従来機と違い、脚どころか下半身が無く、更には腕も無い。あるのは頭部を含めた胴体部分と、フロートユニットのみ、

放たれたそれは音速を越え、フレイヤとぶつかり爆発し、シュナイゼル軍を巻き込んだ。

「フレイヤ！我が軍の近くで爆発!!」

我が軍に対する被害は……甚大!!」

「は?」

シュナイゼルは柄にもなく呆けてしまう。

「よし！アミバの策が決まった!!」

斑鳩の艦橋で艦長の南がガッツポーズをする。

あの日、皆でシュナイゼルの対策を考えていると、アミバは「しかし、あの新型爆弾はどうする?」

そう、フレイヤに対する対策も考えなければならなかった。ルルーシユお得意の戦術すらも食い破る戦略兵器フレイヤ。

もしも今回の様に戦闘中に撃たれでもすれば……

誰もが沈黙する中で、アミバはEUのアレキサンダ・ドローンの事を話す。そこで、星刻と藤堂は思いつく。

無人機による特攻によるフレイヤの自爆させる事を、

そして作られた暁ドローン

腕も脚もないそれは只々フレイヤだけを破壊する簡素な機体だ。

これを斑鳩や小型可翔艦等に幾つか配備していたのだ。

「アイツは本当に凄えよ」

南は呟くと顔を叩き気を引き締める。

「よし！ハドロン重砲拡散モード用意！

混乱するシュナイゼル軍に楔を打ち込め!!」

斑鳩のハドロン重砲が放たれ、爆発四散していくシュナイゼル軍。

ドロテアは前線の部下を指揮し何とか体勢を立て直そうとするが、

「破ああああああ!!!」

藤堂の裂帛の気合いと共に放たれる斬撃がドロテアの駆るパロミデスに迫る。

「くっ!」

しかし、彼女はナイトオブブラウズ。右腕のフィンガーハドロンを壊されるも何とか回避をする。

……しかし、

「影の太刀」

先の裂帛の気合いが嘘かの様な冷静さで振るわれた太刀がパロミデスの下半身を断ち切り、

ドスっ!ドスっ!ドスっ!

次いで放たれた藤堂が得意とする三段突きがパロミデスのコクピットを含めて貫いた。

「……そ……そんな……な」

ドロテアは信じられない。と言った顔で息絶えた。

主人を失ったパロミデスは力無く墜落し、地面に落ちると共に爆発した。

「……………嘘……………」

アーニャは愛機の中で信じられなかった。

そこまで仲が良くなかったとはいえ、ラウンズであるドロテアが、撃たれた事にほんの僅かに呆けてしまう。

ドドドドドドドドっ！

その隙に弾丸砲弾の雨霰がモルドレットを襲う。

「撃て！撃ち続けろ！」

千葉の部隊がモルドレットに対して総攻撃を仕掛ける。

いや、千葉の部隊だけではなく、玉城の部隊もだ。

「アミバの弔い合戦だ！気合い入れろお!!」

玉城の号令に応っ!!と答える団員。

ブレイズルミナスを張り、ミサイルで迎撃するも多勢に無勢、まるで第二次トウキョウ決戦のモルドレットと蜃気楼の様にじわじわとエナジーが削られていく。

そして、

「うおおおおおおりやあああああ!!!」

玉城の暁改のパイルバンカーがモルドレットのブレイズルミナスを破り、次いで二撃目がモルドレットの頭を貫き、三撃、四撃と撃ち続ける度にモルドレットの装甲を破壊していく。

何度も連続で撃ち続けパイルバンカーは壊れてしまうが、機体はポロポロになり最早残ったエナジーで何とか浮いているだけのモルドレットにトドメを刺すのに支障は無かった。

「コイツで!!終わり『もう良い』……………アミバ!？」

トドメを刺そうとすると肩を叩かれた感触と、アミバの声が聞こえた気がした。

玉城は肩に触れると、

「ああ、そうだよな。お前!優しいもんな……………」

玉城はポロポロのモルドレットのкокピットを特参型腕で破り、中で泣きながら気を失うアーニャを機体の左手で保持する。

「悪い。一度戻らせてもらうぜ」

玉城はアーニャを連れて、斑鳩へと戻っていく。

戦いはまだまだ続く。

次回、
裏切り

エピソード3 裏切り

エピソード3 裏切り

アヴァロン内部でルルーシュは藤堂がドロテアを討った事にはそんなには驚きはしなかったが、玉城がモルドレットを墮とした事については驚愕を隠せなかった。ついつい、セシルに二度聴きしてしまう程に、

この勢いなら普通の戦場なら勝てるのだが、シュナイゼルにはギアスとフレイヤがある。

ましてや、此方はシュナイゼルのギアスがどの様なギアスなのかすら分かっていないのだ。

「ナナリー……」

ルルーシュは最愛の妹の名を小さく呟いた。

ルルーシュの騎士。枢木スザクは愛機であるランスロット・アルビオンを駆り、シュ

ナイゼルの手勢を討ち続けていた。

此方の士気は未だ低いものの、戦況は此方が有利。

懸念材料であるフレイヤも先程放たれてから未だに放たれていない。

恐らくはフレイヤの対策を取られているとは思っていなかったのだろう。

ルルーシュ達も対策を作ってはいるものの、未だ制作途中だ。フレイヤを作った二人も「まさか、そんな手で……」と驚いていた。

ロイドやセシルも無人機をあんな風に使うとは思っていなかった。

シユナイゼルやルルーシュですらだ。

これに関してはアミバとギアス世界の人間の見識の違いだ。

アミバは元々この世界の人間ではない。前世でフレイヤをICBMと見立て、迎撃用のミサイルを作るかと考えたのだが……

この世界には短距離用ミサイルは有っても、超長距離弾道ミサイルなんて物はなかったのだ。

似たものと言えば、精々亡国のアキトに出てきたアポロンの馬車ぐらいだ。

話をスザクに戻そう。

スザクは次々と敵を落としていくと、直上方向からハドロン砲が放たれる。

『枢木スザアアク!!』

「!?」

スザクはこの声を知っていた。しかし、この場にいるべき人間ではない筈だ。

「シユネー!どうして君が!?!」

『レドの仇い!!』

シユネーの乗るヴィンセントスナイプのハドロンプラスターが再び放たれる。

「シユネー……赦しは請わないよ……」

スザクは軽々と躲すとMVSでヴィンセントスナイプのフロートと両腕を斬り落とした。

後は脱出機構で安全に抜け出せる筈……と考えていると、ヴィンセントスナイプが爆発する。

しかも只の爆発ではなくフレイヤの光である。

「なっ!?!」

☒生きろ!!☒

スザクは一瞬だが、気が逸れてしまい、ギアスの制御が途切れてしまい、本能的に動いた。

直ぐにフレイヤの輝きから逃れる為に機体を急上昇させる。

そして、飲み込まれる敵味方の機体。

「くっ……」

急上昇した影響と呪いが解けた影響で頭を振るスザク。

「一体……？ シュネー!? シュネー・ヴァイス!?」

通信を送るも返事はない。

スザクは歯を噛み締める。

「シュナイゼル殿下……何故……」

スザクは怒りに飲み込まれそうな頭を落ち着かせ、再び呪いの力を制御していく。

そして、辺りでフレイヤの輝きが幾つも放たれる。

何故、幾つものフレイヤが放たれたのか？ それは、

「特攻兵器だ?!」

フレイヤを付けたKMFを誘導装置とした特攻兵器だった。

「そんな!」

「……………」

余りにも非道な行為に誰もが口を閉じられなかった。

唯一の救いとも言えるのは爆発の範囲が本来の二十分の一……約5k程度の距離し

か破壊していない事だろうか。

あのロイドですら、嫌悪感を隠せていない。

「(どう言う事だ？あのシュナイゼルが……追い込まれているにしてもあの男がこの様な事をするとは思えない。まるでシュナイゼルの皮を……まさか？ギアス嚮団の残党がシュナイゼルや姉上を操っている？いや……奴の部屋シヤルルにあつたギアス関連の資料に有ったギアスユーザーに、母さんと同じ様な能力を持った奴や俺の様な能力は居ない)」
ルルーシユはC・C・Cを見る。

「言っておくが、私がここ数十年で契約したのはマリアンヌ、マオ、そしてお前だけだ」
C・C・Cの言葉にルルーシユは思考の一部を回転させていく。

「(V・V・は奴には秘密のギアスユーザーを作っていたのか？それならばあり得るが……しかし、嘘の無い世界を作ろうとしていた兄弟である奴に黙って作る程なのか?)」
ルルーシユの考えは合っているのか合っていないのかも分からなかった。

富士の麓では富士山を噴火させる為の作業をしていた杉山はフレイヤ特攻兵器を見てマジかよと呟く。

杉山は作業が終わった事を確認すると合流する為に斑鳩へと向かった。

途中でEUからの援軍の表示を見ながら、

「星刻総司令！EU方面の黒の騎士団が援軍に来ました！」

「何っ？EUはブリタニア地方軍とユーロブリタニアと戦闘していた筈だ！」

「ですが、識別反応は我が軍の物です。通信を開きましょうか？」

星刻が通信を開こうと命じる瞬間、艦内に衝撃が走る。

「何が起こった!？」

揺れる艦内にしがみつきながら星刻が問う。

「少々お待ちを……嘘……」

「どうした!？」

「う……裏切りで『ドオン!』キヤア！」

再びの衝撃、今度は砲撃音も聞こえた。

「う……裏切りです！EUの黒の騎士団が裏切りました!!」

「何だって!？」

EU艦隊の旗艦『エロー（フランス語で英雄）』内部

そこには黒の騎士団の制服ではなく、EU軍の制服を着込んだEUの国の軍人達がい
た。

「総員！我々は悪しき皇帝ルルーシュとそれに従う無知蒙昧で厚顔無恥な黒の騎士団に
誅を下す！！我に続けえ！！」

司令官の言葉に部下達は威勢よく「Sir Yes Sir!!」と返事をしていく。
艦内からパンツアーフォンメルや暁が飛び出し、更にはユーロブリタニアのサザーラン
ドやグロースターまでもが飛び出す。

何故、こうなったのか？

床に倒れ伏すEU軍人と政治家達を冷たい目で見る神楽耶は彼等に問う。

「何故…何故この様な事をしたのですか？」

答えは分かっていた。

「ゼロもアミバも無い黒の騎士団など単なる有象無謀！ならば我らEUが生き残る為
はシュナイゼル様に忠誠を誓う他ないだろう！！」

彼等は負けたのだ。シュナイゼルに……

「これよりEU各国を超合衆国から一時除名！現地の黒の騎士団にはEU艦隊の迎撃の指示を！」

「かしこまりました！」

これは、後々の話だが……EU（大国部分）が超合衆国に送ってきた国に関する資料の内経済に関する資料は真つ赤な偽物で、実際は横領と改竄のモザイク芸術であった事が判明し、汚職と横暴のオンパレード、更には日本人（当時はイレブン）の虐殺やナンバーズとなった同胞の迫害という横暴な軍とそれをもみ消す政府。

後にEUの小国を除いて超合衆国の支配下（旧ブリタニアと違い、他国の文化を破壊し尽くして……の方法は取られないが、官僚等政治に関わる職業に就くことが出来なくなつた）となつた。

閑話休題して現場を戦場に戻します。

ダモクレスの指揮室でシュナイゼルの副官であるカノンはシュナイゼル……いや、シュナイゼルの姿をした何者かを見ていた。

数ヶ月、ゼロ……ルルーシュを捕まえようとしたあの日以降、何処となく寂しさと期待を醸し出していたシュナイゼルが、ある日……それらが一切消え去っていたのだ。

それだけなら、違和感を持たないのだが……

突如としてのルルーシュが皇帝になった時に喜びでも楽しみでも困惑でもなく予定通りと言わんばかりの気配を放っていた。

それからダモクレスをその場にいたラウンズである。ノネットとグリンダ騎士団を残してブリタニアの高位貴族達や幾つかの軍基地を周り、少し話すだけで誰もがシユナイゼルに付き従った。

カノンは驚きを通り越して恐れを感じた。

常のシユナイゼルなら高位貴族や軍高官を付き従わせる事は可能……しかし、それは長い時間の交渉や譲歩を掛け合わせての事だ。

今回の様に少しの話だけで一人二人ならまだしも、全員がシユナイゼルに無条件で付き従う事等不可解にも程がある。

しかし、カノンはそれを知っていた……ルルーシュ……そして、ルルーシュに従うマリーベル。最早、故人ではあるが……シン・ヒュウガ・シャイニング。

カノンはギアスの詳細を知らなかったが、ここまで類似する能力を見せられてはシユナイゼルもギアスを持っていると確信してしまう。

いや、それだけならまだ良かった。

何というか、全体に雑になっているのだ。

字の癖……仕事内容……食事の取り方……それらの全てが今までのシュナイゼルから雑……長い間付き添ったカノンだから分かるものではなく、それなりの付き合いの長さの人間なら分かる程の雑さだ。

カノンは念の為、ノネットとグリーンダ騎士団がシュナイゼルと、直接会わない様に手配をし、シュナイゼルを観察し続けてきた。

そして、ペンドラゴンを消滅させたあの日、カノンはシュナイゼルはルルーシュに宣戦布告をした時のあの稚拙さ、まだそこらの凡百な貴族の方がまともな交渉をしている。

そしてその夜、シュナイゼルの部屋に仕掛けた盗聴器から、何時もならワイングラスをコトリお静かに置くのが瓶をダンっ！と叩きつける音が聞こえ、

『クソっ！原作だったらルルーシュは孤立してた筈だろ!!何処のクソバカだ!?オイ!!!』

チート能力を持ってシュナイゼルに憑依したっていうの!!クソっ!クソっ!マジ死ねよ!!カスゴミがっ!!』

アルコールの勢いもあつてか、シュナイゼルは大声で暴言を吐いていく。

ここでカノンはシュナイゼルの中身が別人になり変わっている事に気がついた。

カノンはなんたる愚鈍と自分を責めたが、相手の目的……そして主人であるシュナイゼルを取り戻す手段を模索していた。

「けど、チート能力？イカサマ能力……確かにギアスが催眠術の上位互換ならそう言ってもおかしくないわね」

ギアスの正体を知らないカノンにはシユナイゼル？のチート能力の事をギアスと同じでした。

実際は違うのだが……

しかし、調べるも時間が足らずに、分かったのはあの男はコーネリアやメイドを何人も抱えている事だけだった。

下衆めとカノンは面従腹背をしながらシユナイゼル？に従う。

そう……自分を救ってくれたシユナイゼルに恩を返す為に……

カノン・マルティニーニはブリタニアのマルティニーニ伯爵家の長男として生まれた。

長男と言っても姉が三人いて、化粧だの美容だのは姉や母から教わった。

昔馴染みのノネットも少年時代に出会って、領同士が隣な事もあって、よく遊んだものだ。

彼が変わったのは自宅学習から帝都ペンドラゴンにある貴族学校の高等部に入学し

た時に

お前、女みたいなやつだなあ

と同級生のイジメのターゲットとなった。

しかし、カノンは見た目こそなよなよとしていたが、幼少期とは言えラウンズであるノネットと一緒に遊んでいたのだ。

その身体能力は15歳以下の子供の中では飛び抜けており、いじめっ子を殴り飛ばした。

それから数年、成績優秀ながらも気性の荒く誰にでも喧嘩を売る悪童となった。

そこを監督生であったシュナイゼルが止め、喧嘩となるもシュナイゼルの愛の鞭（物理）に敗れたカノンは、シュナイゼルの虚無を知り、そして彼がどう生きていくのかが見たくなり、シュナイゼルの部下となった。

尚、カノンやコーネリア達より一つ年上のノネットは軍学校に入り

兵隊は走るのが仕事！ついてこーい！！

と、わんぱくダツシュしていた。

そして、今。

カノンはシュナイゼル？に銃を向ける。

「どういうことだい？カノン」

「あら。それは貴方自身がご存知の筈でしょう。ジョン・ドウさん」

シュナイゼルに銃を向けたカノンに周りが騒めく。

中にはギアスか？と呟く者もいて、銃を引き抜こうとするもカノンに「動かないで！」と釘を刺される。

「ジョン・ドウ？何の事かな？もしや、ルルーシユのギアスに……」あら、そのギアスと言うのは目を合わせなければ意味がないのでは？「?!」

シュナイゼル？の言にカノンはハツタリをかます。

ハツタリと言っても幾らかの報告と証拠からの推察。

「貴方がシュナイゼル様ではない事は分かっているのよ！シュナイゼル様を返しなさい！！」

カノンの言葉に周りは動揺する。デートハルトもだ。

そして、

「……カノン……」

「観念したのかしら？」

「一体いつから……」

「はつきり分かったのは「違うよ……」えっ?」

「一体いつから……バレた時の対策をしていないと錯覚していた?」

「パァン！」

シュナイゼル?の言葉と共にカノンの腹部に紅い華が開く。

撃たれたのだ。撃つたのはカノンと同じシュナイゼルに仕える者だ。

しかし、その目にはギアスの様な赤い輝きと「シュナイゼル様に逆らう者は死を」と小さく呟いていた。

「残念だよ。カノン」

シュナイゼルは懐から銃を取り出して、カノンに向ける。

「君は私（シュナイゼル）を裏切らないと思っていたのに……」

そして引き金を引く瞬間、

「シッ」

しかし、カノンは腰に隠していた鞭で反撃し、シュナイゼルの手から銃を弾いた。

そして、一目散に逃げ出す。

血痕を残しながら、

「……………追え! 追うんだ!!」

親衛隊の言葉に周りのオペレーターが警備の人間に指示を出す。

シュナイゼルはカノンが出たドアを忌々しげに見ていた。
そして、デイトハルトはシュナイゼルを冷ややかな目で見ていた。

ダモクレス後方 クランベリー艦橋

ナイトオブナインズの一人、

ナイトオブナインのノネット・エニアグラムはカノンの命令でダモクレスのはるか後方にいた。

「何やってんだい！シュナイゼル殿下は!!」

ノネットはシュナイゼルの行った特攻兵器に対して憤慨していた。

そして、それは彼女に従うグリーンダ騎士団の面々もだ。

もうこうなったら、全部捨てて帰ってやろうかと考えていると、

「……!」

エニアグラム卿!ダモクレスから通信が!

「拒否しな!私等は此処から去る!」

「えっ?あの!?!その!?!わっ、わかりました!!」

克蘭ベリーオペレーターエリシアがノネットの言葉を無視して通信を繋げてしま
う。

「ちよつと！何を……………」

ノネットはエリシアを叱責しようとしたが、通信を見て驚く。

「ノネ……ツト……………」

「カノン!? どうして……………そんな……………」

ノネットが見たのは腹や左肩、顔から血を吹き出しているカノンが居た。

「ごめん……なさいね。実は……………」

カノンは話す。シユナイゼルの中身が別人になっている事を、ギアスと思わしき人を
操る能力を持っている事を、そして全てを伝えると、ゆつくりとコンソールに手をつけ
る。

「私からの最後のお願ひ……………聞いてくれるわね」

「分かった！分かったから待っている！直ぐに助けに「無理……よ……………」

後ろからはドアを開けようとバーナーか何かで鍵が焼き切られていく。

「ナナリー様のこと……………頼んだわよ……………」

それを最後に通信は切られた。

「あのバカ……………」

ノネットの言葉が艦橋の中に重く響く。

ダモクレスの通信室の中では最後の命を振り絞りながらカノンがコンピューターを操作していく。

その間にもドアが焼き切られていく。

「ふふっ……ノネット……私ね……貴方のこと……好き……だった……のよ……」
カノンがエンターキーを押すのとドアが開き、カノンの身体から再び紅い華が咲くのは同時だった。

「あのバカ……」

ノネットの言葉が艦橋に重く響く……と

グリーンダ騎士団のメンバーはノネットの後ろに立つ。

「ノネットさん！我々に出撃の許可を！」

そう言い放つのはマリーベルの筆頭騎士オールドリン・ジヴオンだ。

「………良し！我々はシュナイゼル……いや、シュナイゼルに成り変わった奴を討ち！」

ナナリー様を救う！総員！KMFに騎乗用意！！」

「「イエス マイロード！」」

視線を戦場に戻すと、黒の騎士団側もブリタニア側も士気は最早ボロボロであった。ブリタニア側は元々高くは無かったのに加えて、特攻兵器が、

黒の騎士団側はEUの裏切りで疑心暗鬼となり日本人と中華と各々の国家の人間同士で円陣を組みながら遠距離を中心とした攻撃をしていた。

中にはKMFで逃げ出したり、脱出機構を作動させて逃げる者が出てくる。

このままでは負けると誰もが思っていた。

しかし、

『陛下！アンチ・フレイヤ及びフレイヤが発するエネルギー波長を解析してどの機体にフレイヤが付けられているか分かりました！』

ニーナからの通信が入る。

「よし！直ぐにそのデータを各機に転送！反撃に出る！」

ルルーシュはセシルに指示を出し、EU軍が富士山方面を通過しようとしていたため、本来ならダモクレスに対して使おうとしていた策を使おうとすると、

シユナイゼル軍の後方から赤黒い輝きがシユナイゼル軍のフレイヤを積んだKMFを破壊していく。

「あれは？」

「ギガ・ハドロランチャーだねえ、つと言うことは？」

『ルルーシユ陛下！ナイトオブナインのノネット・エニアグラムです。陛下にご報告したい事が！』

「何っ？」

ルルーシユはこの場で、ノネットが通信を入れてくる事にも裏切ってくる事にも理解ができなかった。

尚、ユーロブリタニアとEU軍は雑に富士山爆破（杉山達はどうの昔に撤収済み）で倒されていった。

そしてルルーシユ達は衝撃的な話を聞いた。

次回エピソードファイナル　ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが望む！

エピローグ・ファイナル ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア
が望む!

エピローグファイナル ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが望む!

「シユナイゼルはやはり、何者かに操られていたのか?やはり、母さんと同じタイプと俺やマリールベルと似たタイプのギアスを合わせ持つ……C・C……一人の人間が複数のギアスを持つ可能性は?」

「ない……と言いたいが、少なくとも私が与えた者にはその様な存在は無かった」

「嚮団の残した資料にもその様な存在は居なかった。つまりはV・Vの個人的な実験なのか?」

ルルーシュは頭を回転させるものの答えは出ず、

「ジェレミアを置いてきたのは失敗だったかも知れないな……」

ジェレミアがいればギアスキャンセラーでシユナイゼルからギアスユーザーを消滅させる事が出来たはずなのに、

戦況は先に比べれば良くなっているが余談は許さない。

一番の懸念はグリーンダ騎士団だ。

少数精鋭部隊であり、後方にいたとはいえ、カールレオン級一隻と第八世代相当機のKMFが四機のみ

と考えていると、ダモクレスの一部分が爆発した。

「なんだ!?何が起こった!?!」

ルルーシユは知らないが、先ほどカノンが操作していたのはブレイズルミナスへのエネルギーラインだった。

カノンはダモクレスのエネルギーの多くをブレイズルミナスに回し、ブレイズルミナスへのラインをオーバーフローさせたのだ。

その影響で、ダモクレスを守るブレイズルミナスは弱くなっている。

ルルーシユはこの隙を逃すわけにはいかないと見て、攻勢に転じる。

そして、

「もうやめるんだ!カレン!!」

「アンタさあ……何言ってるのよ!!」

カレンの紅蓮聖天八極式がジノのトリスタンの頭部を掴み、

「アンタのこと嫌いじゃ無かったんだけど……ねっ!!」

紅蓮最大兵装輻射波動を喰らい、呆気なく爆散する。

そして、

「枢木い!!」

コーネリアの駆るギャラハットとスザクの駆るランスロットがぶつかる。

両機ともエナジーウイングを装備しているとはいえ、スザクのランスロットは元々エナジーウイングを想定した機体、対するコーネリアのギャラハットはビスマルクの専用機を無理矢理改修した機体。

その差は大きく、ギャラハットの手と足、コクピットブロックも破壊されてコーネリアは空に弾き出される。

「姫様ああああああ!!」

しかし、コーネリアに向かって飛ぶ月下の改修機、ゲツカ・アロンソが……そしてその掌には死んだと思われたコーネリアの専任騎士ギルフォード・G・P・ギルバードが手を伸ばしている。

ガシイ!!

ギルフォードは掴めた。

痛む身体を無視して、ギルフォードはコーネリアを抱きしめる。

「姫様………無事で………」

その後、ゲツカ・アロンソは戦場を離脱し、コーネリアとギルフォードは表舞台に出る事はなく、コーネリアも公的には戦死となった。

余談ではあるが、後のブリタニアの田舎の片隅でギルとネリスと言う若い夫婦が農業をしているとかなんとか……

閑話休題

グリンダ騎士団のオルドリンとティンクの愛機、ランスロット・グレイルとゼットラ
ンド・ハートは機体同士を繋げるグリンダ騎士団最大火力であるギガ・ハドロラン
チャールフルブラストモード。通称グレイルチャリオットの赤黒い輝きがダモクレスに
向かう。

しかし、弱体化しているはずのブレイズルミナスを破る事は出来ない。

「皆……お願いが有るんだけど………」

オルドリンはこの状況を打破する策を思いついた。

「OKだよ〜」

何も聞かずに返事をするのはグリンダ騎士団の仲間の一人ソニアだ。

「どう言う策なんだい？」

マイペースに聞いてくるのは技術畑出身のティンクだ。

「……………って策よ！」

「無茶苦茶ですー!」

レオンハルトが無茶だと言うが、

「……けど、それしかないならやるしかないでしょう!」

「理論的には可能だね。けど、それをしたら……」
「覚悟は承知の上よ!」……OK……
グリーンダ騎士団はオールドリンの策をする為に飛び立つ。

そして黒の騎士団側でも

「どうしますか? 菱川さん」

「どうって? 此処で逃げ出す算段か? 嘉崎」

黒の騎士団零番隊副隊長と副隊長補佐を務める菱川康一と嘉崎将真が背中合わせに話し始める。

「それは無いです……」

「だ……なっ!」

答えながら廻転刃刀でヴィンセントウッドを切り捨てる。

「この状況を打破する方法……っす」

バズーカでガレスを破壊する嘉崎。

「そう言うことを考えるのは本来はゼロや星刻総司令達の役割だろ。

……つて言いたいところだが、一つ悪い策なら有るんだが……」

「……………つす」

二人の視線には不発のフレイヤが有った。

グリンダ騎士団と菱川達が動いたのは同時だった。

「ユグドラシルドライブダイレクトコネクション!!」

四機のKMFが一つに繋がる。

「グレイル・グリンダ!!」

それは想定の外に形勢。ランスロット・グレイル。シェフィールド・アイ。ゼットランド・ハート。ブラッドフォード・ブレイブが一つになった姿。その名はグレイル・グリンダ。

そして四機分の出力をギガ・ハドロンランチャーに回し、

更にはハドロンスピアーをも発動。

そして、シェフィールド・アイに装備されているヴァデスシステムでブレイズルミナ

スの比較的脆弱な部分を索敵し、

「っ撃え!!」

そしてその反対側ではフレイヤを搭載したヴィンセントウォードを持ちながらダモクレスに向かう。

「橘くん。中沢くん。俺は今羽ばたいているぞ!」

菱川はかつて、あのユーフェミアが起こした虐殺で死んだ友に想いを馳せる。

「喰らえ!!」

そしてフレイヤをウォードごと投げて、バズーカで破壊する。

赤黒い閃光と純白の煌めき、二つの光がダモクレスのブレイズルミナスに負荷をかけていく。

そして、ブレイズルミナス発生装置が爆発し、ダモクレスを守る盾は消え去った。

「よしっ!」

「これで……」

グリンダ騎士団の面々が言う直前、彼等の機体は爆発する。

それでもコクピットブロックは射出されたが……何故か全員半裸になっていた。

そして、ルルーシユはこれを機と見て、アンチフレイヤを搭載した蜃気楼の改修機ミラージュ（装甲をブリタニア式に換装してカラーリングを白くしただけの機体）に積み込み、出撃する。

先の爆発の衝撃でフレイヤの鍵を落としたシュナイゼルは側近が拾い、ルルーシユに向かつて撃った。

しかし、アンチ・フレイヤを使ったルルーシユとスザクのコンプビにフレイヤは不発となり、ルルーシユ、スザク、カレン、藤堂、千葉……と多くの兵士がダモクレスの中に入る。

しかし、シユナイゼルは既に脱出艇に付いていた。

シユナイゼルは原作通りになったが、ルルーシュ達をフレイヤで殺せば、後は勝ったも同然……

「やれやれ、私の眼も堕ちた物だ……」

タアーン!

「はっ?」

シユナイゼルの胸に赤い染みが広がる。

撃たれたのだ……デイトハルトに、

「デイトハルト! 貴様あ! 何をやっているのか分かってるのか!？」

「分かってますよ。ゼロのカオスを上回る偏在の虚無と思っていた貴方ですが、蓋を開けてみれば単なる俗物、クロヴィス殿下の方がまだマシなレベルなんですよ」

タアーン!

今度はデイトハルトの腹に赤い染みができる。

デイトハルトは痛みを知らないかの様に、自分を撃った親衛隊の頭に狙いを定めて、

タアーン!

撃った。その弾は狙い通りに、親衛隊の頭蓋を貫く。

「意外と当たる物ですね……」

「死ぬのが怖くないのか？」

シュナイゼル……シュナイゼルに取り憑いた存在は仮面を繕う事もやめた。

「ええ、この傷が無くても、私はもう直ぐ死にます……」

床に座り込むデイトハルト。

「私の身体は病魔に蝕まれていましてね……薬物の効果で動けますが、もう内臓がポロポロなんですよ」

お陰で痛みも感じません。とデイトハルトが自笑する。

「だから……何かを求めたのか？」

「ええ……最後の……最後で見間違えましたけど……ね……」

「そう……か……」

シュナイゼルの手に力が抜ける。

「ああ……もう……終わりか……まあ……い……さ……この……」

「ええ……これで……終わり……です……」

ルルーシュはスザクとカレンに内部の敵とナナリーの保護を頼み、自分はシュナイゼ

ルを確保しようとシュナイゼルの内心を読み、脱出艇に急ぐも脱出艇に乗り込む前に倒れ伏したシュナイゼルやデイトハルト達を見つけた。

ルルーシュは最早付ける事は無いと思っていたゼロの仮面（改修されており、小規模で有るがブレイズルミナスを展開可能。無論ギアス対策の偏光グラス仕様）を付け、ミラーージュから降りる。

ルルーシュは周りを警戒しながらシュナイゼルに近づく……

もぞりっ

シュナイゼルが動く。

ルルーシュは銃を向ける。

「る……ルルーシュ……？」

「シュナイゼル！ いや……何者だ!？」

ルルーシュはシュナイゼルに銃を向けるが……

「違う……よ……アレはもう私の中にいない……」

「まさか本物のシュナイゼルか？」

ルルーシュは銃を構えたままだ。

「そうだよ……と言つても、信じられないか……だから、言いたい事だけ言わせてもらおうよ……」

シュナイゼルはそのままの体制のまま喋り出す。

「アレの知識には……君がこの世全ての悪意を受けて枢木卿に殺されていた……」

その代わりに……私を使いなさい。

私は君と言う英雄に殺されて……世界平和の贄になるよ……」

シュナイゼルはそう言うのと、そのまま生き絶えた。

ルルーシユはシュナイゼルの言葉を信じてはいないものの、シュナイゼルの目を閉じようと近づくと、

「やったぜ」

シュナイゼルの身体から飛び出した腕に首を掴まれた。

「なっ!?!」

「いやあく、デイトハルトに撃たれるとは思っていなかったが……此処で主役になれるとは……やっぱ俺様ってオリ主っていうか、世界に愛されてるわあく」

ルルーシユは首を掴む化け物を見る。

ゾンビの様に腐り果てた顔、腐臭を醸し出す臭さ。

ルルーシユはこの様な存在がシュナイゼルを乏めた事に怒りを感じ得なかった。

「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが命じ「おっと、それは禁止な……」

「なっ?」

ルルーシュは身体が軽くなる様な感覚と共に発動させようとしたギアスが消えた。

「お前の魂は要らないから、消えろ。Cあの世界世でユーフェミア達と宜しくしてろ」

ルルーシュは下を見ると自分の身体が有った。

そして、首を掴んでいる手の力が強まり、息が出来なくなってい……いや、首自体がへし折れそうであった。

ルルーシュはどうすれば良いかを考えるが……

ぎやああああああああ!!!

奴の汚い悲鳴が響き渡る。

と、同時に奴の手から力が消え、誰かに支えられる。

(兄さん)(ルル)(ルルーシュ)(ゼロ)

「ロロ！シャリー！ユフィー！アミバ！」

ロロ達がルルーシュを支え、アミバが奴の前に立ちはだかる。

その時ルルーシュの頭の中に存在しない記憶が浮かぶ。

先ほどシユナイゼルが言った様な自分が悪意の象徴となり、ゼロとなったスザクに殺される世界。

KMFが無い世界。

自分がC・C・と融合して魔王になった世界

何故か、自分がC・Cの家庭教師をしている世界。

何故か自分がバンドを組んでる世界

多数の世界……しかし、そのどれにもアミバは居なかった。

「アミバ、お前は……」

いや、とルルーシュは首を振る。

アミバは奴とは違う。

それはそれなりに付き合いの有る自分でも分かる。

「クソが！クソが！クソが！クソがあ!!」

奴は暴れるがその度にアミバに殴られ、蹴られ、斬られる。

(お前は既に死んでいる……大人しくあの世へ行くんだな)

「ふざけんな！アミバ風情が！シャーリー！ユフィー！アミバを拘束しろ!!」

奴はシャーリーとユフィーに命令するが、二人は冷たい視線を奴に向けるのみだった。

ルルーシュはゆつくりと立ち上がり、両の眼にギアスの輝きを灯す。

しかし、そのマークは今までの様な赤い不死鳥が羽ばたくものでは無く、青い黒の騎士団のマークだった。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアとこの世界全ての者が望む！お前は这个世界から消え失せろお!!」

ルルーシュのギアスを受けた奴はシャルルやマリアンヌの様に光となっていく。

「へ? いや! 嫌だ! 何で! 何で俺がこんな目に!」

「(((自業自得だ! / よ! / です!)))」

「クソがアアア!!」

奴は最後の力を振り絞り、此方に襲い掛かるが、

(フンッ)

しかし、アミバは腕を円を描く様に動かして、

トンッ

奴の額を突いた。

しかし、

………何も起こらなかった。

(ん? まちがったかな?)

「はっ! アミバごどきが俺様に逆らうなんて……ひやくばんべん……ばやつ!!!」

遅れて爆発した奴を女性陣に見せない様にするアミバ、

そして、

(ゼロ、後の事は任せた)

そう言つてアミバは消えつつある奴の死体? を持つて何処かへと消え去つた。

そしてシャーリー達も、少しずつ消えていく。

「皆！」

ルルーシユは言葉に詰まる。何を言えば良いのか……謝罪か……それとも別の何かか？

少し悩んだ後、ルルーシユは口を開く。

「皆、ありがとう」

ロ口達は微笑み、そして消えていった。

ルルーシユの頬から一筋の涙が流れた。

そして、

「うっ！」

ルルーシユは両の眼が痛む。

それと同時に、

「なっ!?!」

アヴァアロンの中にいるC。C。も頭に痛みを感じていた。

遠く離れたブリタニア本国では、

ジェレミアと大グリンダ騎士団（ギアス解除済み）そして、合流したピースマークの面々とオイアグロと協力して反乱軍を打ち倒した直後に

「きやつー！」

「何だ!？」

オルフェウスの両目とマリーベルの左目が痛む。

そして全員が眩く。

「『ギアス／コードが消えた』」と

後の世にはこの戦いを「シユナイゼルの乱」と呼び、世界を巻き込んだ戦争となった。

超合衆国を裏切り、シユナイゼルに着いたEU……正確には構成していた大国の面々が主導していたようであり、EU同盟は解体され、今回の主犯の国家はブリタニアを交えた超合衆国の統治下となり、旧ブリタニアのエリア制度をかなりマイルドにした統治（市民の生活は保証されているが、政治関連に参加が出来ない）となり、旧40人委員会
の汚職をしていたメンバーや汚職企業は私財を没収される。

エリアも時間を掛けてはいたが、順々に解放されていった。
世界は少しずつだが平和になっていった。

コードギアス反逆のルルーシュ

コードギアスの世界にアミバの能力を持った転生者って需要があるんですかあゝ!?

FIN

後書きにそれぞれのアフターを書いてみました。